



TITLE:

李義山七律集釋稿(二)

AUTHOR(S):

李義山七律注釋班

CITATION:

李義山七律注釋班. 李義山七律集釋稿(二). 東方學報 1982, 54: 383-445

ISSUE DATE:

1982-03-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/66609>

RIGHT:

李義山七律集釋稿(二)

李義山七律注釋班

* 七律のうち借題詩十首を載せ、七絶一首を附載する。

* 唐詩百名家全集本李商隱詩集を底本とし、とりあげまたは引用する義山の詩には底本の排列による作品番號を記入する。李義山詩各本篇目對照表(本學報五〇冊) 參照。

* 義山の文の引用は樊南文集詳註および樊南文集補編により、「文集」および「補編」と略稱する。

* 文獻(7)の唐詩(藝文版書名「全唐詩稿本」)は、絶句が萬首唐人絶句、絶句以外の詩體が(5)の叢刊本と同系のテキスト、を底本としている。

* 舊注を踏まえる場合も概ね注者は明示しない。舊注諸本の詩釋については、釋者の名をあげ原則として全文を載せる。

* 朱鶴齡本の「補注」は文獻(1)の順治刊本各卷末に附されるもの。何焯および紀昀の項の「評本」は(12)の沈厚煥輯評本を指す。

* 主要文獻一覽

一 無注本

(1) 李商隱詩集三卷 唐詩百名家全集本

李義山七律集釋稿(一)

二 舊注諸本

(2) 李商隱詩集三卷 影印錢謙益寫校本

(3) 李義山集三卷 唐人八家詩本(毛本)

(4) 全唐詩(三卷)

(5) 唐李義山詩集六卷 四部叢刊本

(6) 唐晉統鑑(十卷)

(7) 唐詩(十一卷) 藝文印書館影印本(稿本)

(8) 李商隱詩集十卷補遺一卷 高麗刊本(懷德堂文庫藏)

(9) 唐詩類苑二百卷

(10) 玉溪生詩箋 錢龍惕撰(靜嘉堂文庫藏)

(11) 李義山詩集三卷 朱鶴齡箋注 順治十七年序刊本(内閣文庫藏)

藏)

(12) 李義山詩集三卷 朱鶴齡箋注 沈厚煥輯評

(13) 西崑發微三卷 吳喬撰

(14) 義門讀書記李義山詩二卷 何焯撰

(15) 李義山詩疏二卷 徐德泓・陸鳴皋撰(徐陸合解)(懷德堂文

庫藏)

(16) 李義山詩集十六卷 姚培謙箋

(17) 玉溪生詩意八卷 屈復箋

(18) 重訂李義山詩集箋注三卷集外詩箋注一卷 朱鶴齡原本 程夢

星刪補

(19) 玉溪生詩說二卷 紀昀撰

(20) 玉谿生詩詳註三卷 馮浩撰

(21) 玉谿生年譜會箋四卷・李義山詩辨正不分卷 張采田撰

(22) 李義山詩偶評三卷 黃侃撰

三 唐詩選本注釋

(23) 註唐詩鼓吹十卷 郝天挺撰 廣文書局影印本

(24) 唐詩鼓吹註解大全八卷 廖文炳撰 (內閣文庫藏)

(25) 唐才子詩甲集七言律八卷 金聖嘆撰

(26) 唐詩貫珠六十卷 胡以梅撰

(27) 才調集補註十卷 殷元勳箋註 宋邦綏補註

四 近代注釋

(28) 李義山詩講義 森槐南

(29) 李義山の無題詩 鈴木虎雄 (中國文學報六冊)

(30) 李商隱 高橋和巳 (中國詩人選集一五)

(31) The Poetry of Li Shang-yin 劉若愚

(32) 李商隱詩選 安徽師範大學中文系古代文學教研組

(33) 李商隱詩選 陳永正

* 掲載詩篇目

潭州 20 三八四頁

碧城三首之一 151 三九二頁

碧城三首之二 152 四〇一頁

碧城三首之三 153 四〇六頁

玉山 165 四一頁

一片 181 四一六頁

一片 289 (七絶) 四二一頁

促漏 195 四二三頁

流鶯 322 四二九頁

昨日 369 四三三頁

井絡 391 四三八頁

潭州 20

潭州官舍暮樓空 潭州の官舍 暮樓空し

今古無端入望中 今古端なくも 望中に入る

湘淚淺深滋竹色 湘淚淺深 竹色に滋く

4 楚歌重疊怨蘭叢 楚歌重疊 蘭叢を怨む

陶公戰艦空灘雨 陶公の戰艦 空灘の雨

賈傳承塵破廟風 賈傳の承塵 破廟の風

目斷故園人不至 目斷す故園 人至らず

8 松醪一醉與誰同 松醪一醉 誰とか同じうせん

校

0 唐詩類苑四〇州郡部

3 滋 高麗本「資」

韻

上平一東（空・中・叢・風・同）韻目は廣韻による。以下同じ。

*

1 潭州

〔元和郡縣志二九江南道〕潭州 今爲湖南觀察使理所

禹貢荊州之域。春秋爲黔中地。楚之南境。秦并天下。分黔中以南之沙鄉爲長沙郡。以統湘川。……自漢至晉。並屬荊州。懷帝分荊

州湘中諸郡置湘州。南以五嶺爲限。北以洞庭爲界。漢晉以來。亦爲重鎮。今按其俗。雜有夷人。名徭。自言先祖有功。免徭役也。

隋開皇九年。平陳。改爲潭州。取昭潭爲名也。長沙縣縣下故

陶關。在縣西南五里。晉杜弢據湘州反。陶侃討之。因置此城。

賈誼宅。在縣南四十步。

官舍

〔史記九三陳豨傳〕趙相國周昌見豨賓客隨之者千餘乘。

邯鄲官舍皆滿。〔岑參江行夜宿龍吼灘臨眺詩〕官舍臨江口。灘聲

已慣聞。

暮樓

用例未見。

2 〔陳子昂登幽州臺歌〕前不見古人。後不見來者。念天地之悠悠。

獨愴然而涕下。

今古

〔陳子昂感遇三十八首之三〕蒼蒼丁零塞。今古緬荒途。

〔李白謝公亭詩〕今古一相接。長歌懷舊遊（原注 蓋謝朓范雲之

所遊）。〔杜甫懷瀾上游詩〕眼前今古意。江漢一歸舟（九家注 趙云。正懷瀾上而欲歸。復言眼前有今古無窮之意。特在一舟從江漢以歸也）。〔杜牧題宣州開元寺水閣詩〕六朝文物草連空。天淡雲開今古同。〔文選二二左思招隱詩〕杖策招隱士。荒塗橫古今。

無端 助字辨略卷一に、猶云無故不知其然之辭（用例として義

山の錦瑟一および本作品）といい、詩語解卷下に、猶俚語不合也、

爲奈何不得之辭というように、主體の意向と無關係に或いは意志に反して、何らかの行爲・狀況が展開されるのを示すことば。王

鐸の詩詞曲語辭例釋（一一七頁）は舉例豊富だが、張相とおなじ

く必要以上に語義を細分するきらいがある。〔玉臺新詠二曹植浮

萍篇〕恪勤在朝夕。無端獲罪尤。〔又九蕭子顯燕歌行〕桐生井底

葉交枝。今看無端雙燕離。

ただし、ここはハシナクモでなくタンナシと読み、切れ目・い

とぐちなし、無限の意にとることも可能。〔莊子在宥〕大人之教

……處乎無嚮。行乎無方。挈汝適復之撓撓。以遊無端（成玄英疏

遊心與自然俱遊。故無朕迹之端崖）。出入無旁。與日無始。

望中 二字でながめ。中は恐らく此中の中とおなじく軽い添え

字。柳55（李義山七絕集釋稿（二）本學報五一册五八四頁）参照。

3・4 〔楚宮27〕湘波如淚色漻漻。楚禱迷魂逐恨遙。

〔博物志八史補〕堯之二女。舜之二妃。曰湘夫人。舜崩。二妃

啼。以涕揮竹。竹盡斑。〔述異記上〕湘水去岸。三十里許。有相

思宮。望帝臺。昔舜南巡而葬於蒼梧之野。堯之二女。娥皇女英。

追之不及。相與協哭。淚下沾竹。竹文上爲之斑斑然。

湘淚 〔陰鏗侍宴賦得竹詩〕 湘川染別淚。衡嶺拂仙壇。〔杜甫

千秋節有感二首之一〕 湘川新涕淚。秦樹遠樓臺。〔哀箏307〕 湘波無限淚。〔淚320〕 湘江竹上痕無限。ただし湘淚と熟した例は未見。

淺深 〔文選五五陸機演連珠五十首之四十七〕 臨淵揆水。而淺

深難察。〔李注 慎子曰。離朱之明。察毫末於百步之外。下於水尺而不能見淺深。非目不明也。其勢難睹也。〕

滋 〔文選二九蘇武詩四首之三〕 握手一長歎。淚爲生別滋。

〔又一五張衡思玄賦〕 滋令德於正中兮。含嘉秀以爲敷。〔舊注 滋。繁也。〕〔又三〇謝惠連擣衣詩〕 白露滋園菊。秋風落庭槐。

竹色 〔杜甫滕王亭子詩〕 古牆猶竹色。虛閣自松聲。〔錢起宿

開元寺樓詩〕 竹色寒清簾。松香染翠幃。

4 楚辭に頻出する蘭は、王逸が善鳥香草、以配忠貞、というように正人君子の象徴だが、同時に奸臣子蘭を指すこともあるとされる。離騷の余以爲蘭可恃兮、羌無實而容長、に王逸は、言我以司馬子蘭、懷王之弟、應薦賢達能、可怙而進、不意内無誠信之實、但有長大之貌、浮華而已、と注する。

楚歌 こはむろん屈原の楚辭。ただし一般的には楚のくにの歌の意。〔史記七項羽本紀〕 夜間漢軍四面皆楚歌。〔正義 顏師古云。楚人之歌也。猶言吳謳越吟。〕 項王乃大驚曰。漢皆已得楚乎。是何楚人之多也。〔漢書四〇張良傳〕 戚夫人泣涕。上曰。爲我楚舞。吾爲若楚歌。……歌數闋。戚夫人歔歔流涕。李白杜甫の用例、

また元稹の楚歌十首にしても同様に楚の歌をさす。

重疊 〔文選一九宋玉高唐賦〕 交加累積。重疊增益。狀似砥柱

〔善曰。交加者。言石相交加累其上。別有交加石之勢。在瓊玩蛭上。重益其高。〕〔又三〇謝靈運擬鄴中詠・王粲〕 慶泰欲重疊。公子特先賞。

蘭叢 〔文選五四劉孝標辯命論〕 顏回敗其叢蘭。冉耕歌其茱萸

〔李善注 文子曰。日月欲明。浮雲蓋之。叢蘭欲茂。秋風敗之。〕

〔楊巨源酬于駙馬詩二首之二〕 長得聞詩歡自足。會看春露濕蘭叢。

5 **陶公戰艦** 〔晉書六六陶侃傳〕 陳敏之亂。〔劉〕 弘以侃爲江夏

大守。……侃乃以運船爲戰艦。或言不可。侃曰。用官物討官賊。但須列上有本末耳。於是擊〔陳〕 恢。所向必破。……帝使侃擊杜

駿。……而駿敗走。進克長沙。獲其將毛寶・高寶・梁堪而還。……改封長沙郡公。邑三千戶。賜絹八千匹。加都督交廣寧七州軍事。

空灘 用例未見。

6 **賈傳承塵** 〔西京雜記五〕 賈誼在長沙。鵬鳥集其承塵。長沙俗

以鵬鳥至人家。主人死。誼作鵬鳥賦。齊死生。等榮辱。以遣憂累焉。〔杜甫清明二首之一〕 不見定王城舊處。長懷賈傳并依然。〔許

渾經故丁補闕郊居詩〕 鵬上承塵纔一日。鶴歸華表已千年。なお史記卷八四・漢書卷四八の本傳および搜神記卷九に載せる賈誼と鵬

鳥の話には、承塵の語が見えない。承塵の舊訓ナゲシはあやまり、寢臺などの天蓋もしくは部屋天井であらう。〔釋名釋牀帳〕 承

塵。施於上。承塵土也。〔後漢書列傳七一雷義傳〕 義嘗濟人死罪。

罪者後以金二斤謝之。義不受。金主伺義不在。默投金於承塵上。後葺理屋宇。乃得之。〔搜神記九〕京兆長安有張氏。獨處一室。有鳩自外入。止於牀。張氏祝曰。鳩來爲我禍也。飛上承塵。爲我福也。卽入我懷。鳩飛入懷。

義山は劉蕢にかかわる詩で、劉を二度賈誼になぞらえている。〔贈劉司戸蕢21〕漢廷急詔誰先入。楚路高歌自欲翻。〔哭劉司戸蕢45〕空聞遷賈誼。不待相孫宏。

破廟 用例未見。

7 目斷 見ようとしても見えぬ。與望斷同義（張相語辭匯釋卷三）。〔宋之問送趙六貞固詩〕目斷南浦雲。心醉東郊柳。〔文集六代李元爲崔京兆祭蕭侍郎文〕目斷而不見長安。形留而遠託異國。

故園 〔駱賓王晚憩田家詩〕唯有寒潭菊。獨似故園花。〔陳子昂居延海樹聞鶯同作詩〕坐聞應落淚。況憶故園春。

8 松醪 松を原料に使った酒。醪を文字通りにとればドロクということになる（廣韻の醪字注に濁酒とある）。唐代では潭州あたりの名産だったらしい。〔戎昱送張秀才之長沙詩〕松醪能醉客。慎勿滯湘潭。〔劉禹錫送王師魯協律赴湖南使幕詩〕橘樹沙洲暗。松醪酒肆香。〔裴鉶傳奇〕貞元中。湘潭尉鄭德璘家居長沙。……德璘好酒。長挈松醪春。過江夏。遇叟無不飲之（太平廣記一五二）。義山詩では〔自喜6〕慢行成酩酊。隣壁有松醪。原料にする松の部分にはさまざまなようだが、そのどれに當るかは不明。(1)〔道藏本千金要法二四風毒脚氣方〕松葉酒。……松葉六十斤。咬咀。

以水四石。煮取四斗九升。以釀五斗米如常法。別煮松葉汁。以漬米并饋飯。泥釀封頭。七日發。澄飲之取醉。得此力者。甚衆神妙。〔庾信贈周處士詩〕方欣松葉酒。自和游仙吟。〔王維過太乙觀賈生房詩〕共攜松葉酒。俱簪竹皮巾。義山の〔飲席戲贈同舍47〕唱盡陽關無限疊。半盃松葉凍頗黎。(2)〔千金要法二六治諸風方〕松節酒。……松節（三十斤）猪椒葉（三十斤。細剉。各用水四石。煮取一石）右二味澄清。合漬乾麴五斤。候發。以糯米四石五斗釀之。依家釀法四段。勿令傷冷熱。第一段時。下後諸藥。(3)〔千金要法三六肝臟方〕松膏酒。……以松脂十斤細剉。以水淹浸一周日。煮之。細細接取上膏。水竭。更添之。脂盡。更水煮如前。煙盡。去火停冷。脂當沈下。取一斤。釀米一石。水七斗。好麴末二斗。如家常釀酒法。仍冷下飯。封一百日。脂米麴並消。酒香滿室。細飲之。此酒須一倍加麴。

一醉 〔詩小雅小宛〕彼昏不知。壹醉日富（箋云。童昏無知之人。飲酒一醉。自謂日益富）。〔文選四左思蜀都賦〕合樽促席。引滿相罰。樂飲今夕。一醉累月。

* *

朱鶴齡

4 楚詞九歌。稱澧蘭秋蘭者不一。故曰重疊怨蘭叢。

朱彝尊

頌聯今。腹聯古。

何焯

〔讀書記〕此隨鄭亞南遷而作。第三思武宗。第四刺宣宗。五六則悲會昌將相名臣之流落也。楚詞以蘭比令尹子蘭。蓋指白敏中言之。〔評本「言之」を「令狐綯」に作る。〕

2 此登潭州官舍樓而作。所望者故園人耳。今日斷鄉關。而潭州已事。歷歷在目。無端二字。從空樓寫出。絕妙章法。〔評本「無端」二字有怨意。要知只是自己無聊。與古人原無與。惟其意有未得。故無端所見。皆增悲感。觀首末可知。〕

3・4 入望古今〔評本「入望今古」〕

5・6 雨中壞艦。風中破廟。令人不堪回首。○諠作傳。

7 收望字。

〔評本〕

8 淺學憤調。

陸鳴皋

中四句。俱從第二句寫出。

姚培謙

此傷客中無可與語也。首句。點明興感之由。大凡今人自有今人事。古人自有古人事。千年影現。真屬無端。竹色蘭叢。今所見也。因竹色而想到湘淚。因蘭叢而想到楚歌。古人如在眼前也。空灘雨。破廟風。今所見也。因空灘而想到陶公戰艦。因破廟而想到賈傳承塵。古人如在眼前也。此所謂無端入望中也。豈知不願見者偏見。願見者偏不見。夫吾所願見者。故園知己。相逢一醉而已。若之何其竟不能到眼前也耶。

屈復

一。潭州暮望。二。望中之感。中四。皆承二。湘淚楚歌陶賈。古也。蘭竹風雨。今也。七八。自傷流滯于此。

程夢星

此傷李德裕之罷相遠貶也。大中元年。鄭亞廉察桂州。義山爲從事。義山爲從事。七月。李德裕貶潮州司馬。命題爲潭州者。當是隨鄭亞入桂州。經過潭州聞德裕之事而作。起句。就所過之地發端也。次句。言目中古事。與胸中今事相類。無端入望。觸緒可傷也。三四。謂武宗已崩。使人有蒼梧之悲。宣宗初立。遂致有屈原之放也。五六。謂立功於東川回鶻者。不啻陶侃長沙之功。立言於丹宸六箴者。無異賈誼治安之策也。七八。卽風人未見君子。我心忉忉之意。蓋以道途計之。德裕貶潮。亦當取道於此。語語潭州古事。却語語傷古論今。今古無端一句。固明示其意矣。

紀昀

〔詩說下〕何以不取潭州也。曰。五六有悲壯之氣。起結皆滑調落套。而結尤甚。

〔評本〕起結皆滑調。結句尤滑。五六似乎激壯。實亦浮聲。一摹此種。卽入嘉隆七子門牆。

馮浩

2 陸（崑曾）曰。所言在古。所傷在今。故曰今古無端。徐（逢源）曰。此作於楊嗣復出爲潭州時。三指文宗。四指武宗放逐諸臣。叢蘭指贊皇門下也。疑嗣復鎮潭。義山曾至其幕。○浩曰。

徐說約略得之矣。舊書傳·通鑑。嗣復於武宗即位之年五月。罷相守尙書。九月。出爲湖南觀察。明年三月。遣中使往殺嗣復·李珣。宰相李德裕·崔珙·崔郾等極言。乃再貶潮州刺史。餘互詳前諸篇（崇讓宅東亭²⁸⁵·贈劉司戶黃²¹馮注參照）。此章在潭州作。中二聯。皆從潭境借古以喻今也。首云暮樓空。結云人不見。是義山有意中之人也。時惟贊皇得君富國。會昌一品集有論救三狀。獻替記曰。德裕救不得。他人固不可矣。蓋德裕雖與嗣復不協。而以公義力救。其時之誣二王與賢妃及嗣復者。固中人爲多也。徐氏以叢蘭指李黨。非然矣。○又曰。湘淚句。雖故君常語。然武宗云。嗣復全是希楊妃意。故以比楊妃。點明嗣復得罪之根。下句。謂嗣復重疊被譏。尤工切也。余疑楊妃死在嗣復出鎮後者。於此亦可參悟。○又曰。校定年譜。嗣復貶潮之時。義山漸已還京。故此段遊跡往來。終難得其細確。

張采田

〔會箋〕此桂管歸途。暫寓湖南。遲望李回之作。湘淚淺深。楚歌重疊。喻李黨疊敗。身世孤危。陶公空灘。謂鄭亞遠謫。賈傳破廟。自謂。唐人罷職。往往喜以賈生爲言。不獨寫景也。結則遲李回不至之恨矣。回宗室。與義山同出隴西。故曰故國。松醪一醉。取置醴意。夫君未來。樓空無主。此所以又復北上。而有漢南書事³⁸⁹·萬里風波⁵⁷⁰諸詩也。

〔辨正〕開成五年。江鄉之遊。時楊嗣復觀察湖南。不知義山即寓其幕中否。然集別無顯證。頗疑大中二年。送李回至湘。再由荆門

李義山七律集釋稿（一）

赴巴閬。別希遇合也。此詩其是時作乎。起結看似近滑。實倍沈著。蓋沈著在骨。外面不露耳。晚唐勝於後人處全在此。後人無其用意而強學之。便滑矣。中聯。分寫古今。迥異浮聲。不得以明七子徒有空架者例之。

金聖嘆

暮樓空。言既不對酒。又不攤書。只是憑高閒望。並無他事感發。此卽次句所云無端也。然而心如秋滿月。眼若青蓮花。一任空樓無端。偏是萬端齊起。於是而淚色淺深。怨歌重疊。心同理同。自哭自笑。由來天下絕頂大聰明人。單除二時茶飯。其餘總代古人擔憂。此真不可得而自解者也。

前解自寫解事。此解寫潭州人不解事也。言如此愁絕無聊。庶幾破除有酒。然而巡索全州。更無可語。陶公已去。賈傳又夭。故園信斷。又能奈何哉。

胡以梅（登眺類）

此義山平鋪直敘之作。中間四句。皆用望中本地風光。是承古。結句。是承今也。三四。意在言外。有騷人之旨。……今因望中所見之竹與蘭而有感。……今言戰艦已空。惟雨打泊船之灘。……承塵。承梁塵之物。頂蓋之類。今詩言承塵不見。惟存破廟風吹耳。

近代注釋

〔森〕中卷二七四頁。〔高橋〕一〇四頁。〔安徽師大〕八五頁。

〔陳〕八頁。

*

*

*

詩篇冒頭の二字を借りて題とする作が義山には三十七首ある。

七律十一首（本稿掲載諸篇および錦瑟¹）・七絶十五首（本稿掲載一篇を含む）・五古一首・五律四首・五絶一首・五排五首。詩中の二字を借りて題とする作となればその数はさらにふえる。こうした詩題に艶情の作が多いことは胡震亨がすでに指摘する。

以錦瑟爲眞愁者癡、以爲令狐楚青衣、以爲商隱莊事楚狎綢、必綢青衣、亦癡、商隱情詩、借詩中兩字爲題者儘多、不獨錦瑟

（唐晉癸籤二三）

ただしかれはそれらを借題と呼んではおらず、同じく癸籤卷九のなかで用いられる借題の語は、たとえば、

太白於樂府最深、古題無一弗擬、或用其本意、或翻案另出新意、……不參按白身世遭遇之概、不知其因事傳題、借題抒情之本指、また、金聖嘆においても同様、單に題を借りる意である。

知他聖女定是何物、我亦借題自言我所欲言、即已耳（聖女祠²⁴⁹箋）

詩題の一形式としての「借題」を意識的に使い始めたのは、胡以梅であろうか。

義山無題借題諸篇、說者謂其托美人以喻君子、思遇合之所由作也（無題¹¹¹箋 七律集釋稿¹）本學報五三册六一八頁参照）

なお日知錄二一詩題の條の詩經・杜詩などへの言及参照。

義山詩の借題は、從來無題と簡單に同一視されてきたが、兩者の異同については今後考究すべき一課題であろう。

本作品はむろん艶詩ではなく、潭州の樓上から風雨の景を詠じた矚目の感慨とみなしてよいようである。安徽師大注本八六頁に引く馮注初刊本王鳴盛手批「吊古顯然、傷今則并無明文」の語を借りれば、「傷今」の不分明な内容を特定するかせぬかによって、舊注の解釋は二大別できる。

A 不特定説 姚培謙・屈復・金聖嘆・胡以梅
B 特定説

〔意中の人〕

〔係年〕

B ₁	徐逢源・馮浩	楊師復	會昌元年
B ₂	何焯・程夢星	李德裕	大中元年
B ₃	張采田	李回	大中二年

近代注釋のうち、高橋はB₁説、森はB₁説に一應ふれつつ結局A説だが、森および高橋が7句の「人不至」を、當時楊師復が官舎に留守で會えなかった、と極めて限定した意味に解するのはおかしく、馮浩注にもそのようなことははない。安徽師大はB₂・B₃の折衷で、大中二年、李德裕等を意識しての作とする。また陳永正は原則的にA説をとりつつ、大中二年に係年する。

1 詩文では一般に地名を舊稱・雅稱と呼ぶことがむしろ普通だが、ここは當時の州名をそのまま用いた。官舎も雅語とはいいがたく、暮樓また古來習見の語ではなさそうだ。この作品には由緒正しい詩語よりも、素姓さだかならざる・比較的新しい（と思われる）語彙が目立つ。恐らくこうしたことからんで、陳永正が「暮二

樓空シ」と讀んだのだろうか、やはりむりか。さらにいうならば、1句の表現内容からして特に必要とも思われぬのに、なぜ官舎と明示したか。やはり7句の人不至に關連させるべきか。

2 空虚な暮樓からのながめ。一體何の因果か知らず、今來古往のさまざまなできごとが、本當にさまざま我が目に映るのである。

無端は重い強制の語氣として解する。もし姚培謙などのように「今古ノ無端」と名詞にとれば——古往今來の循環するときできごとが果しなく目に入ってくる。この句は陳子昂の名詩を裏返しにした表現だろう。

3 雨からの連想。舜帝の死を悲しんだ湘水の女神の涙の雨は或いは浅く或いは深くさまざまな色合で、竹の上そこに數多こぼれ落ち。竹色ヲ滋シ、とよめば、涙が雨と重なって竹の色濃さをまし、という風になるう。

4 風からの連想。楚の國の追放された忠臣屈原の歌聲は、何度も何度も繰返し繰返し怨みをこめ、蘭の草むらに音高く吹き寄せる風そのもの。楚歌を朱鶴齡および高橋が九歌に限定するのはよくない。ちなみに澧蘭の語は楚辭に見えず、秋蘭は九歌少司命に再見するほか離騷にも見える。

5 むかし陶侃公の軍船が威風堂々、雄姿を見せて浮んでいたこの長沙だが、いまは空虚な早瀬に雨ふるばかり。空灘は船影を見ない意だろうが、何焯は、廢船のみで人影を見ない意とする。

6 むかしこの地で長沙王の太傅となつた賈誼が鵬鳥の賦を書いた

という豪華な邸宅だが、いまは荒れ果てた廟に風吹きつゝのるばかり。

7・8 なつかしのふるさとの方にいかほど目をやってもやっても結局視界に入らず、さらに心待ちにした意中の人も終に（ここ潭州の官舎で）自分の前に姿を現してくれないのだ。故園は故郷のある北方（都の長安をふくめ）をさすか。地酒の松のどぶろくで折角ひとつ酔おうにも、さてだれが相手になってくれるのか。

7句は、遠地から故園へと歸還しつつある語氣にふさわしくない。かりに大中年間に係年するとして、義山が長安から桂州へ赴任の途次、潭州に立寄つた大中元年四月ごろの作か、同年末から翌二年初頭にかけ、桂州から江陵への往還に潭州での作か、判斷しがたい。また前記B説では、當時の有力者にかける義山の期待空しく、と解しているけれども、もし人不至の人を、肝膽相照す仲の知己と考えれば、劉蕡に批定することも可能ではなからうか。義山は劉蕡に關する五篇、贈劉司戸蕡21・哭劉司戸二首22・23・哭劉蕡76・哭劉司戸蕡45のなかで、かれを賈誼のほか、また常に屈原になぞらえたのを想起すべきである（藍于『李商隱詩論稿』九〇頁参照）。しかし義山の傳記研究の現段階においては、意中の人の特定もおむつかしく、一句ごとに史實でうらを取る要のないA説に従う方がむしろ無難ではなからうか。

（荒井 健）

碧城三首之一 151

碧城十二曲闌干 碧城十二曲闌干

犀辟塵埃玉辟寒 犀は塵埃を辟け 玉は寒を辟く

閨苑有書多附鶴 閨苑 書の多く鶴に附す有り

4 女牀無樹不棲鸞 女牀 樹として鸞を棲ましめざるは無し

星沉海底當窓見 星の海底に沉むは 窓に當つて見

雨過河源隔座看 雨の河源を過ぐるは 座を隔てて看る

若是曉珠明又定 若し是れ曉珠 明又た定なれば

8 一生常對水精盤 一生常に對せん 水精盤

校

0 唐詩類苑一一二部懷古類

1 闌 又玄集・唐詩鼓吹「欄」

干 唐音「杆」

2 辟…辟 又玄集「避」…「避」

3 多 又玄集「空」

4 牀 又玄集・才調集・統鑑「牆」 毛本「牆一作牀」 唐音・唐詩

鼓吹・唐詩品彙・叢刊本・高麗本・類苑「牆」 稿本

「牆」に「牀」と旁注 朱鶴齡本校注「一作牆。非」 全

唐詩校注「一作牆」 錢寫本「牀・牆」讀解不能なるも眉

批に「文選云女牀之鸞鳳」

7 珠 品彙「星」 毛本校注「一作星」

8 常 他本みな「長」

精 又玄集・才調集・鼓吹・唐音・品彙・高麗本・朱鶴齡本・

全唐詩「晶」

韻

上平二十五寒（干・寒・看）二十六桓（鸞・盤） 同用

*

1 義山の詩でこと關連するものとして、〔河内詩・樓上547〕碧

城冷落空蒙煙。簾輕幕重金鈎欄。〔九成宮107〕十二層城閨苑西。

平時避暑拂虹霓。〔月夜重寄宋華陽姊妹381〕偷桃窃藥事難兼。十

二城中鎖彩蟾。〔無題139〕如何雪月交光夜。更在瑤臺十二層。碧

城は恐らく西王母の居處をさすのだろう。〔十洲記〕崑崙山有三

角。其一角正北。干辰星之輝。名曰閨風巔。其一角正西。名曰玄

圃臺。其一角正東。名曰崑崙宮。其處有積金。爲天墉城。面方千

里。城上安金臺五所。玉樓十二。其北戶山承淵山。又有墉城。金

臺玉樓。相似如一。淵精之闕。光碧之堂。瓊華之室。紫翠丹房。

景燭日暉。朱霞九光。西王母之所治。〔拾遺記一〇崑崙山條〕崑

崙山有崑陵之地。其高出日月之上。山有九層。每層相去萬里。有

雲色。從下望之。如城闕之象。……傍有瑤臺十二。各廣千步。皆

五色玉爲臺基。〔鮑溶懷仙詩二首之一〕閨風綺閣（一作崑崙九層）

幾千丈。瑤水西（一作四）流十二城。〔又之二〕崑崙九層臺。臺

上宮城峻。……十二樓上人。笙歌沸天引。ただし碧城という表現

そのものは未見。近似の用例（1）〔太平御覽六七四〕上清經曰。元

始居紫雲之闕。碧霞爲城。（2）〔葛洪枕中書〕扶桑大帝住在碧海之

中。宅地四面。並方三萬里。上有太真宮。碧玉城。

十二はむろん實數ではないが、これと闌干が結びつくのは〔樂府詩集七・西洲曲・古辭〕憶郎郎不至。仰首望飛鴻。鴻飛滿西洲。望郎上青樓。樓高望不見。盡日欄干頭。欄干十二曲。垂手明如玉。卷簾天自高。海水搖空綠。海水夢悠悠。君愁我亦愁。南風知我意。吹夢到西洲。〔戴叔倫蘇溪亭詩〕蘇溪亭上草漫漫。誰倚東風十二闌。さらに闌干と碧城の結びつき方は〔太上黃庭外景上部經第一〕子欲不死修崑崙。絳宮重樓十二環〔務成子注 金樓五城。十二周市。丹黃爲郭。五彩雲集〕〔雲笈七籤二二〕。

2 犀辟塵埃 〔述異記上〕却塵犀。海獸也。然其角辟塵。致之於座。塵埃不入。〔嶺表異錄〕又有駭雞犀。……辟塵犀〔原注 爲婦人簪梳。塵不着也〕。……此數犀但聞其說。即不可得而見也〔太平廣記四〇三犀條〕。

玉辟寒 〔宣室志〕會昌元年。扶餘國貢三寶。……火玉。色赤。長半寸。上尖下圓。光照數十步。積之可以燃鼎。置之室內。冬則不復亦挾纈。宮人常用〔太平廣記四〇四火玉條。なお杜陽雜編にも同様な記載あり〕。〔馮浩注〕西王母有夜山火玉之語。上元夫人帶六出火玉之佩。見武帝內傳。……然玉德溫潤。故艷體每云煖玉。不必拘何事。辟寒の語は〔述異記上〕辟寒香。丹丹國所出。漢武時入貢。每至大寒。於室焚之。暖氣翕然。自外而入。人皆減衣。

3 〔李白贈參寥子詩〕白鶴飛天書。南荆訪高士。〔又酬岑勛見尋就元丹丘對酒詩〕黃鶴東南來。寄書寫心曲。倚松開其緘。憶我腸

斷續。〔盧綸酬暢當尋嵩岳麻道士見寄詩〕開雲種玉嫌山淺。渡海傳書怪鶴遲。〔馮浩注〕鮑照舞鶴賦。望崑閬而揚音。鶴傳書。未檢所本。盧綸詩……可相證耳。〔朱鶴齡注引道源注〕錦帶。仙家以鶴傳書。白雲傳信。褚載〔贈道士〕詩。惟教鶴探丹丘信。不遣人窺太乙爐。昭明太子の錦帶には見えず。あるいは孟誥撰錦帶三卷〔祕書省續編到四庫闕書目二子類類書〕の佚文か。

閬苑 〔庾肩吾山池應令詩〕閬苑秋光暮。水塘收潦清。〔許敬宗遊清都觀尋沈道士詩〕風衢通閬苑。星使下層城。

4 〔山海經二西山經〕女牀之山。其陽多赤銅。其陰多石涅。其獸多虎豹犀兕。有鳥焉。其狀如翟而五采文〔郭璞注 翟似雉而大。長尾。或作鸛。鸛。離屬也。名曰鸛鳥。見則天下安寧〔郭璞注 舊說鸛似雞。瑞鳥也。周成王時。西戎獻之。〕〔文選三張衡東京賦〕鳴女牀之鸛鳥。舞丹穴之鳳皇。〔甘氏星經下〕女床三星。在天紀北主後宮生女事。待帝及皇后。明則宮人自恣。〔徐彥伯贈劉舍人古意詩〕女牀閬靈鳥。文章世所希。

5・6 〔王昌齡蕭駙馬宅花燭詩〕可憐今夜千門〔一作家〕裏。銀漢星回〔一作樣〕一道通。〔文選一班固東都賦〕西澗河源。東澹海濱。北動幽崖。南耀朱垠。〔嵇康卜疑〕有弘達先生者。恢廓其度。寂寥疏闊。……可以居九夷。遊八蠻。浮滄海。踐河源。

5 〔常娥330〕雲母屏風燭影深。長河漸落曉星沉。常娥應悔偷靈藥。碧海青天夜夜心。

星沈 〔蕭子良梧桐賦〕乃抽葉於露始。亦結實於星沈。〔周興

嗣答吳均三首之二〕噓噓夕雲起。落落曉星沈。

海底〔文選二二郭璞遊仙詩七首之六〕吞舟涌海底。高浪駕蓬萊。

當窓〔古詩十九首之二〕盈盈樓上女。皎皎當牕牖。〔李白擬

古十二首之二〕高樓入青天。下有白玉堂。明月看欲墮。當窓懸清光。

6 雨過〔李嘉祐入睦州分水路憶劉長卿詩〕雨過暮山碧。猿吟秋
日曛。

河源〔史記一二三大宛列傳〕大史公曰。禹本紀言河出崑崙。

崑崙其高二千五百餘里。日月所相避隱爲光明也。其上有醴泉瑤池。

〔博物志〕舊說天河與海通。……此人乃多齋糧乘查去。忽忽不覺
晝夜。奄至一處。……多見織婦。見一丈夫牽牛渚次飲之。……此

人即問爲何處。答曰。君可詣蜀嚴君平。此人還。問君平。君平曰。

某年某月。有客星犯斗牛。即此人到天河也〔御覽八〕。〔劉義慶集

林〕昔有一人尋河源。見婦人統紗。以問之。曰。此天河也。乃與

一石而歸。問嚴君平。云。此織女支機石也。

隔座〔白氏六帖二二中書令〕隔座之榮〔原注 吳錄。紀瞻爲
中書令。父亮爲尚書令。每朝會。帝以雲母屏風隔其坐也〕。七律

集釋稿〔本學報五三册六一四頁參照〕。

7・8 盤上の珠という用例は〔博物志〕南海外有鮫人。水居如魚。
不廢織績。其眼能泣珠。……鮫人臨去。從主人索器。泣而出珠滿
盤。以與主人〔御覽八〇三〕。〔張潮襄陽行〕玉盤轉明珠。君心無

定準。〔韋應物詠露珠詩〕將來玉盤上。不定始知圓。〔又漢武帝雜
歌三首之二〕通天臺上月初出。承露盤中珠正圓。〔白樂天琵琶行〕
嘈嘈切切錯雜彈。大珠小珠落玉盤。

7 〔郭義恭廣志上〕莫難珠。其色黃。生東夷。又有明珠稱夜光。
有大珠徑寸。或圓二寸已上。出黃支。有至圓珠。置平地。終日不

得停。〔盧綸王評事駙馬花燭詩三首之二〕爲報司徒好將息。明珠
解轉又能圓。〔李郢夏日登信州北樓詩〕雨歇荷珠定。雲開谷鳥還。

曉珠〔a〕不夜珠〔朱鶴齡その他の説〕。〔趙飛燕外傳〕眞臘夷獻

萬年蛤不夜珠。光彩皆若月照。人無妍醜皆美艷。帝以蛤賜后。以
珠賜婕妤。……久之。帝謂婕妤曰。吾晝視后。不若夜視之美。每

且令人忽忽如失。婕妤聞之。即以珠號爲枕前不夜珠。爲后壽。〔b〕
日〔郝天挺その他の説〕。〔參同契〕日爲流珠。青龍與之俱〔御覽

三〕。〔雲笈七籤八釋三十九章經三十四章〕東華真人呼日爲紫曜明。
或曰圓珠。〔唐太宗月晦詩〕罩雲朝蓋上。穿露曉珠呈。〔c〕啓明〔李

有斐その他の説〕。〔d〕曉月とは考えられないか。〔文選五左思吳都

賦〕蚌蛤珠胎。與月虧全〔劉涓子注 呂氏春秋〔精通〕曰。月望

則蚌蛤實。月晦則蚌蛤虛。李善注 春秋保乾圖曰。日以圓照。

月以虧全。〔令狐舍人說昨夜西掖觀月因戲贈4〕昨夜玉輪明。傳

聞近太清。涼波衝碧瓦。曉暈落金莖。

8 〔城外484〕未必明時勝蚌蛤。一生長共月虧盈。

水晶盤〔王昌齡甘泉歌〕昨夜雲生拜初月。萬年甘露水晶盤。

〔章孝標覽楊校書文卷詩〕紅錦晚開雲母殿。白珠秋寫水晶盤。〔天

平公座中509〕罷執霓旌上醺壇。慢粧嬌樹水晶盤。

〔拾遺記五前漢上〕董偃常臥延清之室。……上設紫瑠璃帳。火

齊屏風。……侍者於戶外扇偃。偃曰。玉石豈須扇而後涼耶。侍者乃卻扇以手模。方知有屏風。又以玉精爲盤。貯冰於膝前。玉精與冰。同其潔澈。侍者謂冰之無盤。必融濕席。乃合玉盤拂之落堦下。冰玉俱碎。偃以爲樂。此玉精千塗國所貢也〔三輔黃圖三にも同様の記載あり〕。

〔李白古朗月行〕小時不識月。呼作白玉盤。

胡震亨

此似咏其時貴主事。唐初公主。多自請出家。與二教人媒近。商隱同時。如文安潯陽。平恩邵陽。永嘉永安。義昌安康諸主。皆先後丐爲道士。築觀在外。史即不言他醜於防閑。復行召入。頗著微辭。味詩中蕭史一聯。及引用董偃水精盤故事。大指已明。非止爲尋恒閨閣寫艷也。

1) 4 此四語。甚貴舍主第。即孫壽賈夫人家未易副。

5) 8 曉珠。日也。曉珠不定。是以有星沉雨過之惆悵。合冥過落來。向曉開門去。天上人亦何必與讀曲小家女大異。

朱鶴齡

〔補注〕義山詩。往往借仙境作艷語。首章。言閨苑女牀。而以飛燕晶盤結之。次章。言蕭史洪崖。而以鄠君繡被結之。同一風旨。

○七夕有期。至生魄之後。久而不來。是猶之網珊瑚□(二字漫漶)

李義山七律集釋稿(一)

枝尙未生也。然神方鳳紙。內傳所載。人間共知。今獨不我肯顧。何哉。

潘畊曰。首章曰一生長對。定其情也。次章曰悵望獨眠。致其思也。末章不免于怨矣。然曰簾箔至今垂。是盼望之情。終未有已也。義山詩。用意多如此。

7 陳帆曰。鼓吹注。曉珠。日也。……□□(二字漫漶)曉珠從日解。則水晶盤當爲月。

朱彝尊

三詩莫得其解。予細按之。似皆爲明皇太真而作。何以知之。玩第三首結句而悟之。蓋以明皇爲武帝。唐人之常也。則其爲明皇無疑。碧城四句。以仙家況宮中之繁麗也。星。小星也。雨。靈雨也。星沈雨過。武惠妃已薨也。當窓隔座。太真後入宮也。結以飛燕比惠妃。合德比太真。言惠妃不死而一生專寵。猶或不至召亂也。

對影句。實寫太真之美也。玉池句。指賜浴華清時也。簫史。謂壽王。洪崖。謂祿山也。放嬌狂舞。謂其侍寵之態也。鄠君。謂明皇也。獨自眠。蜀道雨淋鈴時也。

七夕二句。點長生殿私語事也。月初生魄。則不復圓矣。珊瑚未有枝。則不可期矣。猶言他生未卜此生休也。神方二句。言鴻都道士之渺茫也。武皇二句。總結三首。和盤託出。所謂微而顯也。長孺補注引潘畊語。俱影響之論。

何焯

〔讀書記〕此以咏其時貴主事。……非止爲尋恆閨閣寫艷也(胡震

亨の説を全文引用。

4 鳴女牀之鸞鳥。東京賦中所用山海經也（評本 この條なし）。

〔評本〕

4 晉書。女牀三星。在紀星北。後宮御也。主女事。

5・6 只是言其所處之高。列女傳云。桀爲瓊臺瑤室。以臨雲雨。亦其類也。○腹連。亦江文通登香爐峯詩。中生瞰蜿蜒。俛伏視流星之意。但出處未詳。

徐德泓

三章應是幕府中失意而作也。此章首二句。言境地之佳。第三句。

喻任使者。第四句。喻得地者。第五句。喻己身不遠。故曰當窓見。

第六句。喻不能沾潤。故曰隔座看。結仍冀望之情。言若有明鑒而不惑者。則長仰其清光也。卽所謂得一知己。一生不恨意。

姚培謙

三首總是君門難近之詞。借仙家憶念之詞以寓意耳。首句。言地位之崇高。次句。言陰翳所不到。書附鶴。樹棲鸞。鸞鶴皆仙家傳信之使。言非無媒灼之可通也。處此境界。隱情可以無所不達。雖海底星沉。當窓可見。河源雨過。隔座能看。星沉雨過。皆捉摸不定事。猶且瞭如指掌。所慮者。日光之映射不均。以致月體之圓缺有異。斯實盼望者。所無可如何。否則一生常對團圓之月。豈不快耶。

7 日也。

8 月也。

屈復

詩有小序者可解。無者不可強解。玉溪無題諸作。人皆知爲男女怨慕之詞。獨碧城三首。或指明皇。或解嫁虜公主。何也。凡此類。讀者但知其必有寄託而已。當就詩論義。若必求其事以實之。則鑿矣。○此詩因首句碧城二字。遂以爲題。唐人甚多。不獨玉溪也。與無題同。○當碧城之窗。隔碧城之座也。咫尺千里之意。○一二。仙境清貴。三四。靈妙。五六。深遠。然雖可見可看。而沈過無定。不如一生日月常對之爲愈也。曉珠。日也。水晶盤。月也。○結二句。交互法。言如日月之明而又定。得一生長對也。

程夢星

唐時貴主之爲女道士者。不一而足。事關風教。詩可勸懲。故義山累致意焉。首二句。明以道家碧城言之。謂其蕊宮深邃。天地肅清。犀玉之琛。莊嚴清供。自是風塵外物。豈有薄寒中人。孰知處其中者。意在定情。傳書附鶴。居然暢遂。是樹栖鸞。是則名爲仙家。未離塵垢。豈以牽牛織女。天上有之。神女陽臺。人言可信耶。於是當窗所見。每致念於雙星。隔座所看。慣與思於雲雨。當此幽期。惟求長夜。若是趙后之珠。照嫌爲妍。能至曉而不變。則不至色衰愛弛。漢主當一生眷之。長對其舞水晶盤上矣。此第一首。泛言其梗概也。

紀昀

〔詩說上〕詩有衆說糾紛者。既無本事。難以確主。第各就所見領略之。亦各有得力耳。碧城三首。可如是觀也。○錦瑟一體澁而味薄。觀末二句。意亦止是耳。碧城則寄託深遠。耐人咀味矣。此真

所謂不必知名而自美也。

〔評本〕三首確是寓言。亦無題之類。摘首二字爲題耳。然所寓之意。則不甚可知。胡孝轅以不逢蕭史一聯。謂刺當時貴主。朱竹垞又以（三章）七夕來時一句。定爲追刺明皇。援據支離。於詩無當。義山一集。佳什多矣。不食馬肝。未爲不知味也。

馮浩

胡孝轅曰。此似詠其時貴主事。味蕭史一聯。及引用董偃水精盤故事。大指已明。非止爲尋恆閨閣寫艷也。○浩曰。三詩向莫定其解。曝書亭集（五五書楊太真外傳後）曰。一。詠楊貴妃入道。一。言妃未歸壽邸。一。言明皇與妃定情。係七月十六日。固未然也。錢木庵（良擇）亦有楊妃之解。然首章總不可通。餘亦未融洽。要惟胡孝轅戊籤謂刺入道宮主者近之。第其句下所釋。尙有誤會者。余更爲演之曰。首章。泛言仙境。以賦入道。首句。高居。次句。清麗溫柔。入道爲辟塵。尋歡爲辟寒也。三四。書憑鶴附。樹許鸞棲。密約幽期。情狀已揭。下半。尤隱晦難解。竊意海底河源。暗用三神山反居水下。與乘槎上天河見織女事。謂天上之星。已沈海底。而乃當窗自見。暮行之雨。待過河源。而後隔座相看。以寓遁入此中。恣其夜合明離之迹也。曉珠。似當謂曰。水晶盤。專取清潔之意。不必拘典故。本集中慢裝嬌樹水晶盤。狀女冠之素艷矣。惟曉珠不定。故得縱情幽會。若既明且定。則終無昏黑之時。一生只宜清冷耳。蓋以反托結之也。

1 徐（逢源）曰。江淹詩。闌干十二曲。垂手明如玉。十二字。不

李義山七律集釋稿（二）

必定指城也。

8 舊注引飛燕事。……蓋取與不夜珠相合。然非也。三輔黃圖。董偃……何氏（？）謂曉珠晶盤。皆用董偃事。愚以若用寶珠。則曉字無謂也。今定曉珠謂曰。晶盤不必拘看。

張采田

〔會箋〕此詩向無定解。惟胡孝轅戊籤云。此似詠其時貴主事。味蕭史一聯。及引用董偃水精盤故事。大指已明。非止爲尋常閨閣寫艷也。其說大通。已詳馮箋矣。若謂指明皇貴妃。則必非也。大抵義山信道。好以仙情艷語入詩。有實有本事者。亦有別有寄託者。細審實不易分別。苟所解於通體不甚融洽。固不如仍舊說之爲愈矣。〔辨正〕此三首統籤所解最確。馮氏句下所釋最通。吾無間然矣。竹垞謂指明皇貴妃。未免迂曲。貴妃事唐人不忌。多彰之篇章。本集亦不一而足。何必作謎語。使人迷幻耶。

黃侃

程以三詩皆刺貴主之爲女冠者以備勸懲。是也。第一首。七八句。皆用飛燕外傳事。知以趙氏比貴主。五六句。即第三首末二句意。言其蹤跡雖祕。而物議已滋。所以戒驕淫。止佚蕩。此與陳鄭變風何異。

郝天挺

3·4 此聯言碧城如仙人之宮闕也。
7 曉珠。謂日也。

廖文炳

此詩碧城。疑是宮名。詩中皆托言失幸而寓怨之之詞。首言碧城之高。置異寶於其上。吾不得入見其美。聞仙書則付鶴。今乃信息難傳。牆樹俱栖鸞。今乃不得依倚。皆怨之之詞。又在碧城。則星雖高而影可見。今君近無由見也。雨過空看。不入君王之夢。所以然者。以君心不明不定也。若君心明且定。如曉珠然。則在碧城。得以長對此日矣。曉珠水晶。皆指日以比君王。蓋譏君王信讒逐賢。以怨宮況之。

7 曉珠 謂水晶盤。圓如盤水積千年。化爲水晶。

胡以梅（艷情類）

此詩鼓吹止載一首。注爲懷人之什（王清臣・陸貽典參解十卷本唐詩鼓吹卷七の箋に「此懷人而不可即。故以比之神人」。以本集三首合觀。兼釋此首之三四七八。則所懷之人。不離乎私曜也。起處故以清虛高遠。比之王母所居層城十二樓。然亦兼用青樓。闌干十二曲。有青樓望郎之義早已微露。次則譽其溫和明淨。已落到軟膩地面。三四。初讀似若平平述仙家之事。然有書言晉問之相通附鶴。則傳書之有使。而亦非凡禽也。女牀有雙闌之用。無樹不棲鸞。非謂樹樹皆鸞。蓋言女牀之樹。實爲棲鸞之所。鸞憐孤影。乃戀匹之鳥。此已明白扣至詩旨矣。以下却不欲全身吐露。故作瀟疎之態。支離之語。出入於有無之鄉。以文章爲遊戲。教人噉菖歎之菹。幾何其不爲縮頰三年也。測其旨。總言遠離而心照。雖墮重淵而適異域。仍在窗前座上咫尺之間。星字做樂府借用心以惑人。雨。陽臺之雨。又兼用雨散。且河能與雲雨。義相通也。結蓋惟願晝夜永不

相離。言若是不夜珠至曉光定。即於水晶盤內相看。一生。長遠之詞。橫插一生二字。神理彌趣。凡諸隱曲處。正知其爲私曜。非比君子耳。……樂府西洲曲云。……是知十二闌干。望郎之所。且下之海底。亦本于此海水也。

李有斐（才調集補註引）

曉珠。啓明也。極切曉字。而與戊籤所謂曉珠不定。是以有星沈雨過之惆悵。意尤順。明又定。則既無陰雨以阻其來。又不嚮晨以促其去。可永遂綢繆之樂矣。故云一生長對水晶盤也。

近代注釋

〔鈴木〕七一頁。〔高橋〕五六頁。〔劉〕八九頁。〔陳〕四三頁。

例によつて諸説紛々だが、本作品の場合は、諸家すべて、三首緊密に連關した艷詩たることを一應みとめた上での、説の分歧だと考えられる。舊解は大きく分けて、A詩中に作者の體驗の直接的投影ありとみるもの、B客觀的敘述すなわち諷諭ないし諷刺の作とみるもの、二様になる。

A₁ 純粹艷情説 朱鶴齡・潘耒・胡以梅

A₂ 君臣遇合説 廖文炳・徐德泓・姚培謙

B₁ 入道公主説 胡震亨・何焯・程夢星・馮浩・張采田・黃侃

B₂ 楊貴妃説 朱彝尊

屈復と紀昀は寄託あらんというのみだが恐らくA₂説なのであろう。近代注釋では、鈴木および陳がA₁説。前者は愛の對象たる女性を

仙女に見たてたといい、後者は愛の對象が女道士の可能性ありという。一方、劉は詩人自身の love affair とするには作風が passionate ではなく ambivalent だとして、ほぼB₁説に傾く。しかし、こ

こはAB兩説は否定的媒介とみなす。高橋およびかれを受ける山之内正彦氏〔李商隱表現考・斷章〕東洋文化研究所紀要四八冊九二・一〇八頁〕の解釋に従う。碧城の詩三首は、義山の書いたある美しい戀の「物語」、あるいは幻想的な戀の頌歌である。體驗の投影がなされたとしてもしかと見定められぬほどその影は薄く、貴主御亂行がかりにヒントとしてもそれは全くの素材でしかない。

1 3句の閨苑の語などからしても、碧城を西王母の居城と見るべきは動かせまい。ただそのイメージは、上清經に基づくものとするれば碧い霞の城となるが、劉若愚や Graham ("Poems of The Late Tang") のように碧玉の城と解する方がむしろよい(十洲記および拾遺記のほか、特に枕中書用例が重要)。あるいは義山独自の感覺にもとづく造語かもしれない。十二は虚数だが、胡以梅のいうように碧城十二と十二曲とを兼用し、十二層もの碧城その各層にめぐらされる十二の闌干——ほぼ五重の塔式のかたち想像される。十二を闌干だけにつけ、十二曲の渡り廊下、とする高橋譯はどうか。幾重にも幾重にもとりまく闌干によって下界から隔絶せる異質な空間、そこに2句以下の景が展開して行く。

2 碧城の室内には、かの却塵犀の角が置かれ、一切の塵埃を寄せ

つけぬ清淨無垢。さらには不可思議の寶玉が置かれ、常に寒さを知らぬ。犀と玉はまず調度の品だろうが、簪・佩玉などの装身具であるとも考えられ、そうすると女性の存在が暗示されることになる。

3・4 ここ碧城の閨風の苑からは、戀文とだけさせるため、鶴の使いがしばしば飛び立つ。また碧城にほど近い「女の牀山」^{ねどさん}、その樹々には獨り身の鸞鳥がそれぞれ伴侶もとめて來り棲む。天界の樂園の表象として、後出の玉山165や一片181とも共通するが、本詩の二句は遙かにふくらみ多く豊かな表現。3句の仙界の使者たる鶴、李白の詩にも見えるが、より古い典據は未詳、待考。多を空に作る又玄集のテキストは、この詩の文脈にはどうしても適合しない。また4句の女牀を女牆に作るのは、閨苑との對偶關係からも問題にならない。

5・6 義山は一般的に、盛唐風の雄渾壯麗な自然描寫を敢てしない詩人ではあるが、例の常娥の詩の、廣大無邊の空間を一舉に把握する底の視覺表現がここにも見られる。碧城から見はるかす夜景。夜空(「青天」)の星はまるで深い深い海(「碧海」)の底に沈んで行くようだし、銀河の源はまるで雨のたちこめる水面のように煙っている。その星も銀河も、つい窓ぎわに或いはつい向うの座席に、指呼の間にあるほどの、言語を絶する高みなのだ。そして沈・過は舊解の指摘するように時間の経過をも暗示している。さらに星はまた天界に漂着し織女に逢った男性、雨はやはり巫山

の神女ということ、3・4句が碧城への交信・訪問とすれば、この一連が情人たちの出會の暗喩となる。5・6句はきわめて感覺的でありながら同時に甚だ入りくんだ多重構造のイメージなのだ。ただし、5句の海底、字面としては西方河源に對しての東海だが、そこから海面下の三神山を連想する（馮浩）のは考えすぎだろう。

7・8 この一連では曉珠と水晶盤の指示する方向が難解である。

特に兩者の關係について、完全に首肯できる説は新舊諸解にも見出しがたい。(a)まず曉珠を不夜珠、水晶盤をやはり趙飛燕の故事に基づく、とする朱鶴齡らの説だが、不夜珠はよいとしても、樂史の楊太眞外傳に見える「漢成帝内傳」なるものから、帝爲造水晶盤、令宮人掌之而歌舞云云を引くのはまずい。いうまでもなく樂史は宋初の人で、問題の故事が果して義山の時代に流布していたかどうか（樂史の創作ならば論外だ）。すべて趙飛燕に結びつければ筋は通せるけれども、根據そのものが危い。(b)次に曉珠を太陽、水晶盤を月とする陳帆および姚培謙・屈復ら、およびその變型たる胡震亨・馮浩らの説で、獨特の見解をとる鈴木をのぞき近代注釋はみなこの型に入る。これらの解釋ではいずれも7・8兩句の脈絡がどうしてもぎこちなくなるが、最大の難點は曉珠＝太陽だ。太宗の詩以外に適切な用例がないのはさておき、太陽、陽光はがんらい明かつ定、恒常不變の存在のはずであり、さらには太陽の落下停止（陳永正）が果して「定」と表現されるだろうか。

この方向で最も考えぬかれたのが高橋譯だが、忠實な本文理解という觀點からなお不安が残る。(c)むしろ李有斐の（そして劉若愚が一解としてあげる）曉珠は宵の明星説の方が、7句のみについてはまだ納得しやすい。ただ、先行例の援護射撃皆無。品彙が曉珠を曉星に作るの意を以て改めたのだろう。(d)さて太陽と對照的に常に滿ち缺けのある不安定な天體といえは月であり、月と珠は縁語である。曉珠を曉月とする方が理窟には合う。これまた今のところ先例はなく、義山の他の詩に見える曉暈の語が月をさすのかもしれない程度だが。ところで廖文炳は曉珠＝日＝水晶盤と解した。もし日の代りに月を置くならば、8句は城外の詩の「一生長共月虧盈」を裏返した表現となり——いまや消えがての有明の月、もしこの月が常に明るく照り輝いているのならば、一生のあいだ永久不變の水晶の盤に相對しておられるのだ……。

しかし敍上のように二句を切離さず、盤上の珠として有機的に連關させるのが原詩により忠實な解釋ではあるまいか。一夜の歡樂も終りに近く曉を迎えるころ、水晶盤上には轉りやまぬ大眞珠（不夜珠ひいては美女あるいは女心の連想があってもいい）、もしその眞珠が輝くばかりの明るさもったままびたりと盤上に停止するならば、もはや一生のあいだ明珠をのせた透明な水晶の盤に向きあったままでいよう。ともあれ、曉珠と水晶盤をどのように理解するにせよ、7・8句は永遠の女性の美への祈求とみなしてよいであろう。明珠の停止はすなわち時の歩みの停止であり、そ

ここでそ一切は棄却しうる。義山の艶詩にしばしば見られる、末尾における日常——無残な現實への歸還、そうした悲痛な覺醒がここにはまだ訪れぬ。

(深澤一幸・松岡秀明)

碧城三首之一 152

對影聞聲已可憐 影に對し聲を聞く 已に憐む可し

玉池荷葉正田田 玉池の荷葉 正に田田

不逢簫史休廻首 簫史に逢わざれば 首を廻らすを休めよ

4 莫見洪崖又拍肩 洪崖を見て又た肩を拍つ莫れ

紫鳳放嬌銜楚佩 紫鳳嬌を放にして 楚佩を銜み

赤鱗狂舞撥湘絃 赤鱗狂舞して 湘絃を撥す

鄂君悵望舟中夜 鄂君悵望す 舟中の夜

8 繡被焚香獨自眠 繡被香を焚きて 獨自眠る

校

0 唐詩類苑一一二人部懷古類

3 簫 底本および毛本以外の諸本「蕭」

4 莫 稿本「莫」に「若」と旁注 全唐詩校注「一作若」

又 高麗本「更」

7 悵 毛本校注「一作帳」

韻

下平一先(憐・田・肩・絃・眠)

李義山七律集釋稿(一)

*

1 對影聞聲 (a) 自らの影に對し聲を聞く女。〔玉臺新詠九鮑照行

路難詩四首之四〕中有一人字金蘭。被服纖羅繡芳華。春鸞差池風

散梅。開帷對影弄禽雀。含歌攬淚不能言。人生幾時得爲樂。〔又

五何遜詠照鏡詩〕對影獨含笑。看花空轉側。〔李白白頭吟〕妾有

秦樓鏡。照心勝照井。願持照新人。雙對可憐影。〔又擣衣篇〕閨

裏佳人年十餘。鸞娥對影恨離居。この解釋では聞聲の處理が困難

になる。(a₁)〔拾遺記〕火齊鏡高三尺。暗中視物如畫。向鏡則聞

影應聲。周人見之如神(廣記二二九周靈王條)。(a₂)〔李百藥火鳳

詞二首之一〕歌聲扇後出。妝影鏡(一作扇)中輕。未能令掩笑。

何處欲障聲。(a₃)〔駱賓王代女道士詩〕臺前鏡影伴仙娥。樓上簫

聲隨鳳史。いずれも決め手にはなりにくい。

(b) 男が女をうかがう。〔玉臺新詠四謝朓夜聽妓二首之一〕瓊闥

鉤響聞。瑤席芳塵滿。〔又五何遜嘲劉孝綽〕稍聞玉鉤遠。猶憐翠

被香。〔劉孝綽詠姬人未肯出詩〕帷開見釵影。簾動聞鉤聲。徘徊

定不出。常羞華燭明(類聚一八)。〔劉禹錫同賦春中一物從一韻至

七詩〕鶯。能語。多情。……林疎時見影。花密但聞聲。本詩と語

彙がいささか重なる義山の詩〔七月二十八日聽雨後夢作68〕少頃

遠聞吹細管。聞聲不見隔飛煙。

可憐 〔徐彥伯擬古詩三首之三〕荷花嬌綠水。楊葉暖青樓。中

有綺羅人。可憐名莫愁。〔李白清平調詞三首之二〕借問漢宮誰得

似。可憐飛燕倚新粧。

2 「樂府詩集二六江南・古辭」江南可採蓮。蓮葉何田田。魚戲蓮葉間。魚戲蓮葉東。魚戲蓮葉西。魚戲蓮葉南。魚戲蓮葉北。〔又四五王金珠歡聞歌〕艷艷金樓女。心如玉池蓮。持底報郎恩。俱期遊梵天。

玉池 「文選三一江淹雜體詩・秣中散」朝食琅玕實。夕飲玉池津（李善注 衡山記曰。空青崗有天津玉池。傅玄擬楚篇曰。登崑崙。漱玉池）。

荷葉 「王勃夏日登韓城門樓寓望序」荷葉滋而曉霧繁。竹院靜而炎氣息。義山の「春秋獨遊曲江373」荷葉生時春恨生。荷葉枯時秋恨成。

田田 「李涉寄荆娘寫真詩」綠池並戲雙鴛鴦。田田翠葉紅蓮香。〔白樂天新栽蓮詩〕汙溝貯濁水。水上葉田田。

3 簫史 「列仙傳下」簫史者。秦穆公時人也。善吹簫。能致孔雀白鶴於庭。穆公有女字弄玉。好之。公遂以女妻焉。日教弄玉作鳳鳴。居數年。吹似鳳聲。鳳凰來止其屋。公爲作鳳臺。夫婦止其上不下數年。一旦皆隨鳳凰飛去。故秦人爲作鳳女祠於雍宮中。時有簫聲而已（道藏本）。〔梁武帝遊仙詩〕簫史暫徘徊。待我升龍轡。〔庾信奉和趙王西京路春旦詩〕弄玉迎簫史。東方竟細君。

休迴首 義山〔北齊二首之二27〕晉陽已陷休迴首。更請君王獵一圍。迴首の語は、七絶集釋稿（本學報五〇冊四七六頁參照）。
4 「文選二一郭璞遊仙詩七首之三」左挹浮丘袖。右拍洪崖肩。〔又七首之六〕姮娥揚妙音。洪崖領其頤（李善注 列子曰。領其

頤則歌合律）。〔南史二二王筠傳〕昭明太子愛文學士。常與筠及劉孝綽陸倕到洽殷鈞等遊宴玄圃。太子獨執筠袖。撫孝綽肩曰。所謂左把浮丘袖。右拍洪崖肩。其見重如此。〔文選二八陸機前緩聲歌〕太容揮高絃。洪崖發清歌（李善注 西京賦曰。洪崖立而指麾。薛綜曰。三皇時伎人也）。〔神仙傳〕孝武帝閒居殿上。忽有一人乘雲車。駕白鹿。從天而下。來集殿前。其人年可三十許。色如童子。羽衣星冠。帝乃驚問曰。爲誰。答曰。吾中山衛叔卿也。……帝卽遣使者與度世共之華山。求尋其父。……（度世）於絕巖之下。望見其父與數人博戲於石上。紫雲鬱鬱於其上。白玉爲床。又有數仙童執幢節。立其後。……度世曰。不審向與父並坐是誰也。叔卿曰。洪崖先生。許由。巢父。火低公。飛黃子。王子晉。薛容耳（廣記四衛叔卿條）。〔國史補上李泌任虛誕條〕李泌相。以虛誕自任。嘗對客曰。令家人速灑掃。今夜洪崖先生來宿。〔七月二十八日68〕旋成醉倚蓬萊樹。有箇仙人拍我肩。

5・6 「馬融廣成頌」發樞歌。縱水謳。淫魚出。著蔡浮。湘靈下。漢女游。〔文選一九曹植洛神賦〕從南湘之二妃。携漢濱之游女。歎匏瓜之無匹兮。詠牽牛之獨處。〔曹植九詠〕感漢廣兮羨游女。揚激楚兮詠湘娥。〔宋之問秋蓮賦〕泛漢女。遊湘娥。鳴佩玉。戲清渦。中流欲渡兮不蘭楫。幽泉一曲兮採蓮歌。

5 紫鳳 「師曠禽經」青鳳謂之鶉。赤鳳謂之鶉。黃鳳謂之鶉。白鳳謂之鶉。紫鳳謂之鶉（埤雅八鳳條）。〔王昌齡蕭郎馬宅花燭詩〕青鸞飛入合歡宮。紫鳳銜花出禁中。義山にまた〔相思299〕相思樹

上合歡枝。紫鳳青鸞並羽儀。

放嬌 義山以前の用例未見。こことやや關わるものに〔李賀秦

王飲酒詩〕花樓玉鳳聲嬌嬌。

楚佩 〔離騷〕扈江離與辟芷兮。初秋蘭以爲佩。〔文選〕二郭

璞江賦〕冰夷倚浪而傲睨。江妃含睇而嚬眇〔李善注 列仙傳曰。

江斐二女。出遊江濱。鄭交甫所挑者。〔列仙傳〕鄭交甫常遊漢江。

見二女。皆麗服華麗。佩兩明珠。大如雞卵。交甫見而悅之。不知

其神人也。……遂下與之言曰。……知吾爲不遜也。願請子佩。……

……〔二女〕手解佩以與交甫。交甫受而懷之。既趨而去。行數十步。

視懷空無珠。二女亦不見。詩云。漢有遊女。不可求思。言其以禮

自防。人莫敢犯。況神仙之變化乎〔廣記五九江妃條〕。義山にま

た〔擬意58〕解珮無遺跡。凌波有舊遊。

6 赤鱗狂舞 〔文選〕六江淹別賦〕驚駟馬之仰秣。聳淵魚之赤鱗

〔李善注 韓詩外傳〕六〕曰。昔伯牙鼓琴。而淵魚出聽。瓠巴鼓

琴。而六馬仰秣。〔李賀李憑箏篋引〕夢入神山教神嫗。老魚跳波

瘦蛟舞。狂舞は用例未見。

湘絃 〔楚辭遠遊〕使湘靈鼓瑟兮。令海若舞馮夷。〔曹植仙人

篇〕湘娥拊琴瑟。秦女吹笙竽。〔錢起湘靈鼓瑟詩〕善鼓雲和瑟。

常聞帝子靈。馮夷徒自舞。楚客不堪聽。……曲終人不見。江上數

峯青。〔莊若納湘靈鼓瑟詩〕出沒遊魚聽。逶迤彩鳳翔。〔韓愈送靈

師詩〕四座咸寂默。查如秦湘絃。〔七月二十八日68〕逡巡又過瀟

湘雨。雨打湘靈五十絃。

李義山七律集釋稿(一)

7・8 〔說苑善說〕鄂君子皙之汎舟於新波之中也。乘青翰之舟。

……榜枻越人。擁楫而歌。歌辭曰。今夕何夕。牽舟中流。今日何日

與王子同舟。山有木兮木有枝。心悅君兮君不知。於是鄂君子皙乃

搴脩袂。行而擁之。舉繡被而覆之〔玉臺新詠九〕越人歌としてこ

の歌辭を載せる。〔李白寄遠十二首之十一〕美人在時花滿堂。美

人去後餘空牀。牀中繡被卷不寢。至今三載聞餘香。義山の詩に

〔牡丹169〕錦幃初卷衛夫人。繡被猶堆越鄂君。〔念遠489〕牀空鄂

君被。杵冷女嬰砧。またここと似た表現に〔夜冷482〕西亭翠被餘

香薄。一夜將愁向敗荷。

7 悵望 〔文選〕二〇謝朓新亭渚別范零陵詩〕停驂我悵望。輟棹子

夷猶〔李善注 蔡邕初平詩序〕もと序の字を脱す。下記江淹詩注

によつて補う〕曰。暮宿河南悵望。天陰雨雪滂滂。〔又三一江淹

雜體詩休上人別怨〕相思巫山渚。悵望陽雲臺。〔李白擬古詩十二首

之十一〕相思無由見。悵望涼風前。〔七月二十八日68〕瞥見馮夷

殊悵望。鮫綃休賣海爲田。

舟中 〔岑參郡齋南池詩〕偶從池上醉。便向舟中眠。

8 焚香 〔庚信華林園馬射賦〕徵萬騎於平樂。開千門於建章。屬

車釐酒。復道焚香。

獨自眠 〔樂府詩集七九近代曲辭・石州〕自從君去遠巡邊。終

日羅幃獨自眠。なお贈歌妓二首之三64〔七絕集釋稿(二)本學報五一

冊五九三頁〕參照。

*

*

胡震亨

3·4 如金仙玉眞之師事道士史崇玄。皆不逢蕭史而拍洪崖肩者也。

7·8 心說君兮君不知。自歎不得爲洪崖也。

朱鶴齡（三九五頁參照） 朱彝尊（三九五頁參照）

何焯

〔讀書記〕7 心悅君兮君不知。蓋自恨不得爲洪崖也。

〔評本〕第二。足上憐字。我憐渠。渠應憐我也。○此篇爲觀伎作。

次連。謂不別憐他人也。

1 暗藏望字。

徐德泓

此應爲同事者發。首句有鄙薄意。而其時正在幕中。故接句暗用蓮花幕事也。三四句。喻非吾侶勿再濫與也。五六句。只在狂放二字。狀其擾亂歌筵雅會也。末以鄂君自況。而曰繡被焚香。曰獨自。其矜貴不羣之象可見。

姚培謙

此首則憂或問之之詞。對影聞聲。親近無由。玉池荷葉。隱密難見。若使逢蕭史而回首。遇洪崖而又拍肩。則專一之志荒矣。且世間有情之願進左右者何限。銜佩則紫鳳放嬌。撥絃則赤鱗狂舞。彼孰非爭妍而妒寵者。獨眠惆悵。豈無繡被焚香之鄂君乎。青眼諒當有屬矣。

屈復

一二。憶昔日相見時地。三四。遙囑之詞。猶言除我一人。莫更求

新知也。五六。憶當日之歡情。七八。今日之淒涼。與五六對照。

程夢星

第二首。言之加詳。首二句。借用梁武帝歡聞歌詞（樂府詩集では王金珠の作）。不但對玉郎之影。愴怳日成。卽或聞玉郎之聲。亦復神往。此所以爲可憐也。三四。言蕭史乃嘉偶也。既以未遇其人。不爲廻首矣。若洪崖則道侶耳。豈可嫌疑不別。輕與拍肩乎。五六。言其塵心未斷。情欲日滋。乃致放嬌之紫鳳。竊銜楚佩。狂舞之赤鱗。敢撥湘絃。紫鳳以喻執袴膏梁之屬。赤鱗則喻賣珠射鳥之流矣。七八。言其人綢繆繾綣。有如鄂君之於越人。可揄袂而擁之。舉繡被而覆之。庶爲我心寫令。若獨宿焚香之夜。得無黯然銷魂。易生悵望耶。此首較前。已極寫其放蕩矣。

紀昀（三九六頁參照）

馮浩

次章。先美其色。對影聞聲。已極可憐。況得遊戲其間耶。不逢蕭史。謂本不下嫁。何有顧忌。莫見洪崖。謂得一浮邱。情當知足。紫鳳赤鱗。狂且放縱之態。然而尙有欲親而未得者。故獨眠而悵望耳。

張采田（三九七頁參照）

黃侃

第二首。二句。卽承可憐之意。憐蓮音同。吳聲歌曲。皆以蓮爲憐也。紫鳳赤鱗皆喻狂放。鄂君以喻未見洪崖以前所遇之人。

胡以梅

此爲所歡出遊。而防猜思慕之作也。首乃遙憶之詞。次乃出遊之候。三四。言止可與郎依戀。切勿更與他人相親。防猜而丁寧。痴情之畢露也。五六。摹想妝態妖嬌。擅長雅技。然曰放嬌。曰狂舞。則無貞靜之氣。所以有三四之猜防耳。結言己之無聊。悵望獨眠。其情可勝言哉。一二。謂其影其聲。皆屬可憐。聲影今在採蓮之處也。由虛而實。兩句串下。但義山故作不相連屬。以混人眼目。其法脉仍有草蛇灰線高處。三四。若作世事內意。無可取義矣。樂府江南古辭解題曰。蓋美芳辰麗景。嬉遊得時也。……今詩……明是言遊嬉。且曰不逢莫見。明是出門之事。若處曲房深院。何由致此。……鄭交甫遇漢皋二女解佩珠。則亦楚佩尤切。今日鳳銜。是簪釵之飾。珠更相宜。……湘絃。湘靈之琴絃。此句言鼓瑟之妙。

近代注釋

〔鈴木〕七一頁。〔高橋〕五九頁。〔劉〕九一頁。

1 對影と聞聲、二つのことばの指す方向は、檢しえた用例に徴するかぎりどうやら矛盾する。(a)女がひとり鏡に映じた自分の影とむかいあい、聲(ひとりごと、あるいは歌聲、あるいは腕輪佩玉など装身具のたてる音)を聞いている——對影の先行例に忠實に譯すればこうなるが、影は自己・聲は相手(男)とする(a₃)のはこの場合不可能だから、どうしても女が自らの聲を聞くと解するしかないのは苦しい。(b)女の姿は見えなくても、その影(文字通り形に對する影、あるいは人そのものでなく装身具など片影・

片鱗)を目にし、その聲を耳にする男性——對影の語解にやや不安は残るかもしれないが、聞聲については落ち着くし、劉孝綽・劉禹錫の詩も援用するならば、やはり相手の影と聲とするのが無難だろう。影と聲だけの女だが、それだけでもうほんとうにいい感じがつのる。

2 ここ崑崙の玉の池には蓮の葉が一面に生いしげり、それはまさしく戀の花盛りの季節と呼應する。古樂府にもとづく象徴的な景。馮浩さらには胡以梅の解釋は理につきすぎる。

3・4 さだめの相手の簫史に逢ったのでなければ、他に色目使つてはならないよ、あなたは弄玉——そのかみの秦の穆公の姫にたぐう女性なんだから。例の洪崖先生に會つても、ほれこんじまつて抱きついたりしてはだめだよ。簫史と並べて神仙界の色男として洪崖を登場させたのは、後者もまた樂才の持ち主のせいだ。この一連は屈復の説が最も簡要。4句「莫」を「若」に作る稿本の異文に従うと、3句とうまく文脈がつづかなくなる。

5・6 漢水の女神が鄭交甫を魅惑した、あの佩玉を口にくわえ、紫の鳳がこれ見よがしの嬌態をほしきままにしながら飛びまわる。赤い鱗きらめかす魚が、湘水の女神のかきならす瑟の絃にあわせ、狂ったように亂舞する。簫史を自任する相手のねがいにもかかわらず、女は媚態のかぎりつくしての他の男性への挑發をやめない。義山の詩でも最もエロチックなイメージの一。5句を、別の男(紫鳳)への女の寝返り、とする高橋説はとらない。6句の湘

絃に錢起の詩がからんでいるならば、「曲終人不見」が終りの一連にひびいて行く。

7・8 かつては向こうから思い寄せられて抱擁し繡被でおおった、鄂君も一夜さみしく彼方ながめてなげくばかり。その繡の夜着に香をたきしめ——なのにもなししいひとり寝だ。

二章も各連それぞれ一つの物語り、あるいはその一場面として讀めよう。1・2の女性が特定されていないだけで、3・4は簫史・洪崖という、神仙の才子、5・6は共に水の女神、7・8は鄂君。そしてすべてが話し手のことばとして述べられている。登場する女性は鄂君の思いの対象だろうが、劉君愚もいうように、たとえば鄂君が直ちに作者と重なり合う底の構造ではないと考えるべきだ。

(松尾良樹)

碧城三首之三 153

七夕來時先有期 七夕來る時 先ず期有り
洞房簾箔至今垂 洞房の簾箔 今に至るも垂る
玉輪顧兔初生魄 玉輪顧兔 初めて魄を生じ
4 鐵網珊瑚未有枝 鐵網珊瑚 未だ枝有らず
檢與神方教駐景 神方を檢與して 景を駐め教め
收將鳳紙寫相思 鳳紙を收將して 相思を寫す
武皇內傳分明在 武皇の内傳 分明に在り

8 莫道人間總不知 道う莫れ人間 總て知らずと

校

0 唐詩類苑一二二人部懷古類

5 與 高麗本「攀」

景 毛本・朱鶴齡本小注「音影」

韻

上平五支(垂・枝・知)七之(期・思) 同用

*

1 「漢武帝內傳」孝武皇帝好長生之術。常祭名山大澤。以求神仙。……帝夜間居承華殿。東方朔董仲舒侍。忽見一女子着青衣。美麗非常。帝愕然問之。女對曰。我壻宮玉女王子登也。向爲王母所使。從崑山來。語帝曰。聞子輕四海之尊。尋道求生。……從今百日清齋。不閑人事。至七月七日。王母暫來也。帝下席跪諾。言訖。玉女忽然不知所往。

「齊諧記」桂陽城武丁有仙道。常在人間。忽謂其弟曰。七月七日。織女渡河。諸仙悉還宮。吾向以被召不得停。與爾別矣。弟問織女何事渡河。兄何當還。答曰。織女暫詣牽牛。吾去後三千年當還耳。明日失武丁所在。世人至今猶云。七月七日。織女嫁牽牛(文選三〇謝惠連七月七日夜詠牛女詩注)。「曹植九詠注」牽牛爲夫。織女爲婦。織女牽牛之星。各處一旁。七月七日。得一會同矣(文選二七魏文帝燕歌行注)。

先有期 「劉孝綽爲人贈美人詩」巫山薦枕日。洛浦獻珠時。一

遇便如此。寧關先有期。

2 やや似通った詩句に〔李賀三月過行宮詩〕垂簾幾度青春老。堪鎖千年白日長。義山の〔無題二首之二367〕重幃深下莫愁堂。臥後清宵細細長。

洞房

〔楚辭招魂〕娉容修態。綰洞房些。〔文選一六司馬相如長門賦〕日黃昏而望絕兮。悵獨託於空堂。懸明月以自照兮。徂清夜於洞房。〔杜甫洞房詩〕洞房環珮冷。玉殿起秋風。

簾箔

〔三輔黃圖二桂宮條〕三秦記。未央宮漸臺西有桂宮。中有明光殿。皆金玉珠璣爲簾箔。處處明月珠。金陛玉階。晝夜光明。〔玉臺新詠九徐君倩別義陽郡二首之二〕故留殘粉絮。挂看箔簾釘。〔李白擣衣篇〕明月高高刻漏長。眞珠簾箔掩蘭堂。

至今

〔文選一九宋玉登徒子好色賦〕然此女登牆闥臣三年。至今未許也。〔張謂邵陵作〕遙望零陵見舊丘。蒼梧雲起至今愁。

3 玉輪

〔駱賓王在江南贈宋五之問詩〕玉輪涵地開。劍匣連星起。〔李賀夢天詩〕老兔寒蟾泣天色。雲樓半開壁斜白。玉輪軋露濕團光。鸞珮相逢桂香陌。

顧兔

〔楚辭天問〕夜光何德。死則又育〔王逸注〕夜光。月也。育。生也。厥利維何。而顧兔在腹〔王逸注〕言月中有兔。何所貪利。居月之腹而顧望乎。〔李白上雲樂〕陽鳥未出谷。顧兔半藏身。

初生魄

〔書康詒〕哉生魄〔傳〕始生魄。月十六日。明消而魄生。〔文選二一郭璞遊仙詩七首之七〕晦朔如循環。月盈已見魄。

4

〔海中經〕珊瑚生海中。欲取之。先作鐵網沈水底。珊瑚貫網而生。歲高二三尺。有枝無葉。形如小樹。因絞網出之。珊瑚皆摧折在網中〔御覽八〇七〕。〔洽聞記〕自且蘭有積石。積石南有大海。海中珊瑚。生於水底。大船載鐵網下海中。初生之時。漸漸似菌。經一年。挺出網目間。變作黃色。支格交錯。小者三尺。大者丈餘。三年色青。以鐵鈔發其根。於舶上爲絞車。舉鐵網而出之。故名其所爲珊瑚洲。久而不採。却蠹爛糜朽〔廣記四〇三珊瑚條。新唐書藝文志小說家類〕鄭遂洽聞記一卷とある。〔燕臺詩・春542〕愁將鐵網罥珊瑚。海闊天翻迷處所。

5 神方

〔列仙傳上〕偃仙餌松。體逸眸方。足躡鸞鳳。走超騰驤。遺贈堯門。貽此神方。盡性可辭。中智宜將。〔抱朴子內篇五至理〕孔安國祕記云。〔張〕良得黃石公不死之法。不但兵法而已。又云。良本師四皓。用里先生綺里季之徒。皆仙人也。良悉從受其神方。雖爲呂后所強飲食。尋復修行仙道。密自度世。但世人不知。故云其死耳。〔漢武帝外傳〕初〔李〕少君與議郎董仲相親。見仲宿有困疾。體枯氣少。乃與其成藥二劑。并其方一篇。……〔仲〕試取服之。未半能行。身體輕壯。所苦了愈。藥盡。氣力如三十時。乃更信世間有不死之道。……後八十餘乃死。臨死謂子道生曰。我得少君神方。我不信事。懷恨黃泉。汝後可行求術人。問解之者。若長服此藥。必度世也。〔方干題龍瑞觀兼呈徐尊師詩〕世人莫識神方字。仙鳥偏栖藥樹枝。

駐景

本來は淮南子にもとづき〔四一二頁參照〕、太陽をとめ

る義。〔李白日出行〕魯陽何德。駐景揮戈。ここは原義とややずれるだろう。〔馮浩注〕說文。景。光也。駐景。猶駐顏之意。

謂得神方。使容顏光澤。不易老也。〔抱朴子內篇九道意〕了無治身之要。服食神藥。延年駐命。不死之法也。〔又一仙藥〕靈飛散。未夫丸。制命丸。羊血丸。皆令人駐年却老也。〔神仙傳〕次乃草木諸藥。能治百病。補虛駐顏。斷穀益氣〔太平廣記一〇劉根條〕。〔集仙錄〕〔大仙〕以道德二經及駐景靈丸授之而去〔廣記六一王妙想條〕。ただし時間の流れがとまれば人體の老死もやむことになり、兩義は別に矛盾しない。〔謝朓和紀參軍服散得益詩〕金液稱九轉。西山歌五色。鍊質乃排雲。濯景終不測。雲英亦可餌。且駐羲和力。

6 鳳紙 〔馮浩注〕徐〔逢源〕曰。鳳紙。唐宮宸翰所用。王建宮詞〔百首之六〕。每日進來金鳳紙。殿頭無事不教書。是也。〔朱全忠請車駕還京表〕昨奉詔書。兼宣口敕。……親綸言於鳳紙。若面丹墀。認御札於龍衣。如親翠蓋〔舊唐書一七七崔胤傳〕。

〔鄭中記〕石虎詔書。以五色紙着鳳雛口中。〔劉孝威謝齊宮紙啓〕雖復鄴殿鳳銜。漢朝魚網。平淮桃花。中宮穀樹。固以慙茲靡滑。謝此鮮光。なお道教文獻での用例は未見。

7 唐代ないし北宋の書目における漢武内傳の記載をあげれば〔隋書經籍志史部雜傳類〕漢武内傳三卷〔日本國見在書目雜傳家〕漢武内傳二卷葛洪撰〔舊唐書經籍志史錄雜傳類〕漢武帝傳二卷〔新唐書藝文志子錄道家類〕漢武帝傳二卷

胡震亨

三四爲初瓜寫嫩。饒涎欲垂。

胡夏客〔統鑑五七〇引〕

家君定此詩。人多未領。後讀劉中山題九仙公主舊院詩。武皇曾駐蹕。親問主人翁。前此詩人。亦未嘗諱言。何疑玉溪生也。

朱鶴齡〔三九五頁參照〕

朱彝尊〔三九五頁參照〕

何焯

〔評本〕此篇蓋謂私其侍婢而作。○唐人率以明皇爲武帝。小馮云。讀落句。方知其事之隱。

徐德泓

此似爲有所許而未踐者發。首二句。言先有約而迄今不至也。中四句。曰生魄。則圓期已過。曰未有枝。則尙無所獲也。其惟駐景以待。而相思愈難釋矣。結語。蓋謂前言可據。豈能掩飾乎。仍是望之之意。

陸鳴皋

右三首。泛作遊仙。意無歸着。若參別解。尤覺模糊。應須作如是觀也。

姚培謙

此首則言有感之無不通也。未來必先有期。故深垂簾幙以待之。此時一點誠心。如願鬼初生之魄。不圓滿不已。如珊瑚未茁之枝。不

透出不休。於是神方駐景。暗授靈文。鳳紙相思。不愁間闕。如武皇內傳所志。人間天上。直呼吸可通耳。曾何壅閉之足憂哉。○此詩向來解者。多涉支離。胡孝轅謂其爲當時貴主爲女道士者發。亦因蕭史一聯耳。然詩旨淵微。必坐定事實。語妙反覺易窮。不如以詩還詩之爲得也。

屈復

一。當時不負所約。二。會處至今無恙。三。新月如故。四。比美人不見也。五。願長得少年。六。相思無已。乃今日之有期不來者。將毋畏他人知耶。然內傳分明。莫道人之不知。何用避忌而不一會也。詩之文義如此。若必立所指。何人何事。誰能起玉溪于九原而問之哉。

程夢星

至第三首。則直紀其迹之彰著。而致警于人言之可畏也。起謂如女牛之會合多時。簾箔之深垂甚祕。顧兔生魄。早已有娠。珊瑚無枝。但猶未產耳。然而顏色將衰。或有徐娘老矣之歎。何不檢與神方。留駐光景。抑或柔情不斷。當有蕭郎路人之怨。自必收將鳳紙。再寫相思。言至此盡其情矣。雖然古昔有之。不獨此也。漢武帝臨幸大長公主。呼賣珠兒董偃。爲主人翁。載在史冊。何可不思所以懲乎。按劉中山過九仙公主舊苑。亦云。武皇曾駐蹕。親問主人翁。用意與此正同。嘗見箋此三首。因唐人率以明皇爲武帝。遂以此爲玉環而作。未見其允。胡氏統簾。亦謂爲貴主之爲女道士者。似與三首通暢。○愚嘗謂義山作此等詩。鄙褻至矣。使不善學者讀之。

即以爲治容誨淫可也。山谷懺悔綺語。義山作俑可乎。然考其源本。實從國風離騷。及三都兩京長楊羽獵諸賦得來。蓋侈言其情事。而歸之于正道。所謂備鑒戒也。

紀昀(三九六頁參照)

馮浩

三章。程箋頗妙。謂紀其迹之彰著。而致警於人言之可畏也。首句。迦歡會也。次句。以深藏引起下聯。兔曾在腹。網未收枝。比喻隱而實顯。當與藥轉92參看。戊籤謂初瓜寫嫩。誤矣。五六。惟願美色不衰。歡情永結。若云鴻都道士。絕不可符。結二句。總括三章。漢武內傳。多紀女仙。故借用之。不可泥看。孝轅之子夏客云。讀劉中山題九仙宮主舊院詩。武皇曾駐蹕。親問主人翁。前此詩人。未嘗諱言。何疑於玉谿哉。以此解之。通體交融矣。若以武皇爲定指明皇。則楊妃之事。先後詩人。彰之篇什。即本集中。明譏毒刺。不一而足。何獨於此而必隱約出之哉。

1 用牛女會合。不可因七句謂用漢武內傳王母來事。

8 莫謂我不知之也。

張采田(三九七頁參照)

黃侃

第三首。三四句當如程說。七八句諷刺之意至顯。韓退之華山女詩篇末云。豪家少年豈知道。來繞百巾脚不停。雲窓霧閣事慌忽。重重翠幙深金屏。仙梯難攀俗緣重。浪憑青鳥通丁寧。與義山此詩意同。而退之蘊藉矣。

胡以梅

此因勢不可爲。而致其情也。言初時原有佳期。至今垂簾相待。孰知月圓而有虧缺。珊瑚竟無舉網之機矣。聊將駐景神方。以緩待歲華。止托鳳箋達意。明我相思已爾。此必有償敗之者。故結句有畏人言而謝絕之意。卽前（無題367）風波菱弱之謂耶。……此句曰玉輪。曰願兔。曰魄。似覺文複。不及鐵網珊瑚。各是一物之爲妙。……今言未有枝。空下網而無望矣。……駐。停。景。光陰。留日月以長生也。

殷元勳

結句是戒之言。莫謂深居縱欲。無人得知。固已昭然難掩也。甚得國風刺淫之旨。

近代注釋

〔鈴木〕七一頁。〔高橋〕六二頁。〔劉〕九二頁。

* * *

連作の終章たるこの詩また「甚だ解しがたし」（鈴木）。各句の主體が見定めにくいのがその主因であろうが、前二章同様すべて話し手のことばとみて、主體＝作者と短絡せぬ方がよい。

1 むかし、西王母は漢の武帝に七月七日の夕への來訪に前もってその期日を告げたのだが。この句はまた牽牛と織女の天上の戀物語を連想させ、主人公たる仙界の女性は當然西王母でありそして織女でもあっていい。七夕もまた義山の好んだ詩材で、辛未七夕160・壬申七夕262・七夕203・七夕偶題462等の作がある。馮浩が典故

に漢武内傳をあげまいとするのは角を矯めて牛を殺すものだ。

2 碧城の館の奥まった房室の簾はといえば、今なおひそかに下ろされたまま。程夢星・馮浩その他は密會の果たされたことと取るが、女の居室の簾が下りたままだというのは、約定にもかかわらず「女、房を閉じて來らず」（鈴木）で、結局女と逢えていないことの暗示と考える。

3・4 兎の住む玉輪（の月）にはもうかけりができ、海底の鐵の網のなか珊瑚の枝はまだ生えない。いま缺け始めた満月、引きあげるには幼なすぎる珊瑚、何の得るところもなく佳期は過ぎる。

いすかの嘴と食違い、戀の成就のままならぬのを形象化した表現だが、同時に、明清を通じ最高の唐詩學者胡震亨が直感し、さらに高橋が力説するように、まだうら若い美少女の姿態、そうしたイメージが喚起されよう。しかし程・馮・黃とくに劉が、妊娠から墮胎まで連想するのは一向に頂けない。

5・6 うつろいやすい時と美しさ、いまだかなわぬ逢瀬。そこで神祕靈妙の處方を檢索し、太陽の神の力をとめて不老長生も可能にさせよう。そして神仙のみの用いる鳳紙を手にし、つるる思いのたけをつづろう。與、將は動詞のあとにつく助辭。5句の教は6句の寫との對を考えれば、教ウと動詞によむべきかもしれないが、文意が通じにくく、一應馮浩などに従い使役によんでおく。

7・8 天上と地上との心の通い合い、それがあひうるのは、かの漢の武帝の内傳の存在によって明明白白ではないか。この人間世

界の一切與り知らぬこととは誰にも言わせない。

仙界の女性を對象に据えたところから、貴女あるいは女道士の情事をうたったものという説は確かに成り立ちえよう。しかし、碧城三首における詩的世界は、おそらくそうした即物的解釋を拒絶している。そして終章の結二句は連作の締め括りであるかのようだ。ほとんど幻想的な措辭のみで押し通してきたこままでに比して、話し手の口を借りての、義山の肉聲の響くのが感じられる。外的な制約を捨象したうえに、戀愛という「思想」は成立し得るのだと、義山は語っているようだ。

(松田佳子・中原健二)

玉山165

玉山高與閨風齊 玉山高きこと閨風と齊し
玉水清流不貯泥 玉水の清流 泥を貯えず

何處更求迴日馭 何處にか更に求めん 日を廻らすの馭

4 此中兼有上天梯 此中に兼ねて有り 天に上るの梯

珠容百斛龍休睡 珠は百斛を容る 龍睡るを休めよ

桐拂千尋鳳要棲 桐は千尋を拂う 鳳棲むを要む

聞道神仙有才子 聞くならく神仙に 才子有り

8 赤簫吹罷好相攜 赤簫吹くこと罷め 好し相攜うと

校

0 唐詩類苑一一一人部懷古類

李義山七律集釋稿(一)

1 與 又玄集「共」 文苑英華「共集作」 稿本旁注「共」 全

唐詩校注「一作共」

風 錢寫本「峯」

5 百 又玄集「萬」

8 赤簫 高麗本「清商」

韻

上平十二齊(齊・泥・梯・棲・攜)

*

1 玉山 「山海經二西山經西次三經」西南四百里。曰昆侖之丘。

……又西三百五十里。曰玉山(郭璞注 此山多玉石。因以名。穆天子傳謂之羣玉之山)。是西王母所居也。「穆天子傳二」辛卯。天子北征。東還。乃循黑水。癸巳。至于群玉之山。容□氏之所守。

……阿平無險。四徹中繩。先王之所謂策府。寡草木而無鳥獸。……天子於是取玉三乘。玉器服物。於是載玉萬隻。「文選二六謝朓郡內高齋閑坐答呂法曹詩」若遺金門步。見就玉山岑。「韋應物懷素友子西詩」恒當清觴宴。思子玉山岑。

「世說新語容止」山公曰。嵇叔夜之爲人也。嚴嚴若孤松之獨立。其辭也。傀俄若玉山之將崩。「晉書三五裴楷傳」楷風神高邁。容儀俊爽。博涉群書。特精理義。時人謂之玉人。又稱見裴叔。則如近玉山。映照人也。「賈島上杜駙馬詩」玉山突兀壓乾坤。出得朱門入戟門。

閨風 「離騷」朝吾將濟於白水兮。登閨風而縹馬(王逸注 閨

風。山名。在崑崙之上。〔十洲記〕崑崙山。三角。其一角正北。干辰星之輝。名曰閼風巔。〔李白擬古十二首之十〕仙人騎綵鳳。昨下閼風岑。

2 玉水

〔文選二六顏延之贈王太常詩〕玉水記方流。璇源載圓折。〔李善注〕尸子曰。凡水其方折者有玉。其圓折者有珠也。ここは1句の玉山に對應する川の名で、あるいは飛泉をさすか。〔阮籍詠懷詩（拔劍臨白刃）〕飛泉流玉山。懸車栖扶桑。〔楚辭遠遊〕吸飛泉之微液兮。懷琬琰之華英。〔王逸注〕咀嚙玉英。以養神也。〔司馬相如大人賦〕互折窈窕以右轉兮。橫厲飛泉以正東。〔張揖曰〕飛泉。飛谷也。在崑崙山西南。〔漢書五七下〕。

清流。〔文選一九曹植洛神賦〕爾迺衆靈雜遝。命儔儔侶。或戲清流。或翔神渚。或采明珠。或拾翠羽。〔李白元丹丘歌〕朝飲颯川之清流。暮還嵩岑之紫煙。

貯泥

〔曹植九愁賦〕寧作清水之沈泥。不爲濁路之飛塵。

3 迴日馭

義和弭節兮。〔王逸注〕義和。日御也。望崦嵫而勿迫。迴日馭。義和なしいし義和の行爲、二様によめる。〔離騷〕吾令

〔1〕日馭ヲ廻ラス。〔顏延之赤瑾頌〕日御北至。夏德南宣。〔李父奉和初春幸太平公主南莊應制詩〕地出東郊迴日御。城臨南斗度雲車。〔錢起奉和聖製登朝元閣詩〕翠微迴日馭。丹轡駐天行。〔送從翁東川弘農尙書幕〕日馭難淹蜀。星旄要定秦。

〔2〕日ヲ廻ラスノ馭。〔淮南子天文訓〕爰止義和。爰息六螭。是謂懸車。〔注〕日乘車駕以六龍。義和御之。日至此而薄於虞泉。義

和至此而迴六螭。〔初學記一〕。〔文選二一郭璞遊仙詩七首之四〕六龍安可頓。運流有代謝。……愧無魯陽德。迴日向三舍。〔李善注〕淮南子〔覽冥訓〕曰。魯陽公與韓遼難戰。戰酣日暮。援戈而麾之。日爲之反三舍。〔李白蜀道難〕西當太白有鳥道。可以橫絕峨眉巔。地崩山摧壯士死。然後天梯石棧相鉤連。上有六龍回日之高標。下有衝波逆折之回川。

4 上天梯

〔淮南子地形訓〕昆侖之丘。或上倍之。是謂涼風之山。登之而不死。或上倍之。是謂懸圃。登之乃靈。能使風雨。或上倍之。乃維上天。登之乃神。是謂大帝之居。〔山海經一八海內經〕華山青水之東。有山名曰肇山。有人名曰柏高。柏高上下于此。至于天。〔括地志〕佛上天青梯。今變爲石。沒入地。唯餘十二蹬。〔史記一二三大宛列傳身毒國張守節正義〕。なお袁珂は、古代の人が山そのものを天へのきざはしと考えていた、というが〔山海經校注四五〇頁〕、義山詩の場合はどうか。

上天の用例は他に、〔楚辭招魂〕魂兮歸來。君無上天些。〔李白送魯郡劉長史詩〕軒后上天時。攀龍遺小臣。上天梯とは即ち天梯であろう。〔崔駰大將軍西征賦〕陟隴阻之峻城。升天梯以高翔。〔類聚五九〕。〔王逸九思傷時〕緣天梯兮北上。登太一兮玉臺。義山詩の類似例に〔寄羅劭興〕3〕混沌何由鑿。青冥未有梯。

5

〔莊子列禦寇〕河上有家貧恃緯蕭而食者。其子沒於淵。得千金之珠。其父謂其子曰。取石來鍛之。夫千金之珠。必在九重之淵。而驪龍領下。子能得珠者。必遭其睡也。使驪龍而寤。子尙奚微之

有哉。〔文選五左思吳都賦〕 翫其磧礫而不窺玉淵者。未知驪龍之所蟠也。〔劉淵林注 尸子曰。龍淵生玉英。〕

百斛 〔李白寄韋南陵冰詩〕 堂上三千珠履客。甕中百斛金陵春。〔楊齊賢注 金陵春。酒也。〕〔張籍野老歌〕 西江賈客珠百斛。船中養犬長食肉。

龍休眠 〔鮑溶探珠行〕 海宮正當龍睡重。昨夜孤光今得弄。

6 〔詩大雅卷阿〕 鳳凰鳴矣。于彼高岡。梧桐生矣。于彼朝陽。〔鄭箋 鳳凰之性。非梧桐不棲。非竹實不食。〕〔韓詩外傳八〕 黃帝即位。宇內和平。未見鳳凰。惟思其象。……於是黃帝乃服黃衣。戴黃冕。致齋於宮。鳳乃蔽日而至。止帝東園。集帝梧桐。食帝竹實。沒身不去。〔文選四三趙至與嵇茂齊書〕 俯據潛龍之淵。仰蔭棲鳳之林。〔玉臺新詠七簡文帝代樂府三首雙桐生空井〕 晚葉藏棲鳳。朝花拂曙烏。〔錢起詔許昌崔明府拜補闕詩〕 何樹可棲鳳。高梧枝拂天。……則知驪龍珠。不祕清冷泉。〔文選六〇賈誼弔屈原文〕 鳳凰翔于千仞兮。覽德輝而下之。〔李善注 文子曰。鳳凰飛千仞。莫之能致也。〕

拂 〔離騷〕 折若木以拂日兮。〔王逸注 拂。擊也。一云蔽也。〕聊逍遙以相羊。

千尋 〔文選三四枚乘七發八首之一〕 龍門之桐。高百尺而無枝。〔李善注 魯連子曰。東方有松樅。高千仞而無枝也。〕〔又一孫綽遊天台山賦〕 建木滅景於千尋。琪樹璀璨而無珠。

7 **神仙** 〔古詩十九首之十三〕 服食求神仙。多爲藥所誤。〔李白

李義山七律集釋稿(一)

題嵩山逸人元丹丘山居詩〕 拙妻好乘鸞。嬌女愛飛鶴。提攜訪神仙。從此鍊金藥。

才子 〔左傳文公十八年〕 昔高陽氏有才子八人。……齊聖廣淵。明允篤誠。天下之民。謂之八愷。〔文選一〇潘岳西征賦〕 終章山東之英妙。賈生洛陽之才子。

8 **赤簫** 〔蕭方等三十國春秋〕 涼州人胡安據盜發掠州人張駿墓。

見駿貌如生。得赤玉簫。紫玉笛。〔初學記一六〕 簫と赤の結びつきは五行説にもとづくか。〔易通卦驗〕 夏至之樂以簫。〔鄭玄注曰。簫亦管也。形似鳳翼。鳳。火禽也。火數七。夏時又火用。〕〔初學記一六〕 〔鮑溶與峨眉山道士期盡日不至詩〕 寄言赤玉簫。夜夜吹清商。

吹罷 〔李白鳳凰曲〕 鳳女吹玉簫。吟弄天上春。青鸞不獨去。更有携手人。影滅彩雲斷。遺聲落西秦。〔又鳳臺曲〕 是日逢仙子。當時別有情。人吹綵簫去。天借綠雲迎。

相攜 〔玉臺新詠八劉遵萬山見采桑人詩〕 逐伴西蠶路。相攜東陌頭。〔李白贈丹陽周處士詩〕 羽化如可作。相攜上清都。

* *

胡震亨

似爲津要之力能薦士者咏。非情詞也。下首〔一片181・深宮280〕意同。

7・8 才子指津要子弟。期與之同登也。
吳喬

當時權寵。未有如綯者。此詩疑爲綯作。

1・2 極言歎美。

3・4 言其炙手。

5・6 二語。言君相相得。

7・8 卽擬薦子虛名之意。

何焯

〔讀書記〕戊籤云。似爲津要之力能薦士者咏。非情詞也（評本

さらに「與一片詩意同。才子指津要子弟。期與之同登也」の三句あり）。

〔評本〕

1 地位高。

2 鑒別審。

3 力可回天。

4 警之。

徐德泓

此亦比也。前半。自喻才華高朗而清麗。不必別求上聞。而自可達也。後半。言握珍不失。而欲近君。冀當塗之推挽也。點出才子二字。爲通首關鍵。

姚培謙

此以汲引望同調也。首句。地望之峻。二句。流品之清。三句。言其方得君。四句。言其能薦達。夫百斛之珠。豈私一龍。千尋之桐。豈私一鳳。幸逢才子。而居神仙之地。此非凡俗之勢要者比也。吹

簫引接。能無厚望也耶。

屈復

一。地之高。二。清明之極。三四。更無他處可以迴日登天。五。祝其醒悟。六。自欲至此。七八。才必憐才。定相携也。○玩結句。似求人薦達之意。

程夢星

此詩亦望恩干進之意。

紀昀

〔詩說上〕此實咏玉山。非摘首二字爲題之比。○純乎託意。三四。有力量。五六。有風旨。〔詩說下〕問玉山寓意何在。曰。此望薦之詩也。首二句。言其地位清高。三四句。言其力可援引。五六句。一宕一折。珠容百斛龍休睡。言毋爲小人之所竊弄。桐拂千尋鳳要棲。言當知君子之欲進身。末二句。乃合到自己明結之。

〔評本〕此望薦之詩。借玉山以託意。首二句。言其地望清高。三四句。言其勢可憑藉。五句。戒以遠小人。六句。折入求進之意。七八。以本意結之。

馮浩

吳氏發微。謂爲綯作。信然。蓋首聯比內相之清高。次聯言只此可恃。奚用他求。三聯言我欲相依。爾休不顧。結更醒出援手之望。綯爲楚子。故曰才子。爲翰林。故曰神仙。必點明才子者。冀其承父志而愛我也。余初疑集中前人泥指令狐者。未可盡信。及訂明全集。乃知屬望子直。自此而下。篇什極多。蓋其始既有深恩。其後

子直得君當國。義山必不能舍此他求。故不禁言之繁也。讀者勿疑。
8 此句不重赤字。實暗用蕭史吹簫。夫妻同鳳飛去。故曰相携。詳前註。以比朋友。詩家常例也。

張采田

〔會箋〕馮氏云。吳氏發微。謂爲絢作。信然。首聯比內相之清高。次聯言只此可恃。奚用他求。三聯言我欲相依。爾休不顧。結更醒出援手之望。絢爲楚子。故曰才子。爲翰林。故曰神仙。箋曰。殊如馮說。此在洛未入都時作也。

胡以梅（艷情類）

此是刺貴家。或宮闈之亂。首言所居高潔。如神仙之境。何等崔嵬。則玉山下之水。宜乎至清。無可貯泥之理。但日馭既不照臨。終年幽閉。其中竟有梯階可通天上也。夫驪龍一珠。尙且被探。何況今容百斛之多。分付老龍。其可睡乎。而鳳凰不懼桐高。正欲栖也。

豈不聞神仙才子。蕭史携弄玉之事。神仙才子。言詭秘履危之踪迹。調笑之語。非眞贊美。按詩中玉山天子所幸。閭風王母所居。日馭上天。龍與蕭史。俱近宮闈之用尤切。豈賦東都上陽之事。第三更合。若作世事內意。兼字休字難安放。……吹簫相携。用蕭史弄玉事。用赤簫。渲染眩目耳。

近代注釋

〔森〕下卷一六六頁。

1・2 玉山は、世のありとあらゆる山巔をはるかに越え、かの閭

風のみねとその高さはひとしいほど。わき出る玉水の清流はあくまで澄み切って、玉のならんだ川床が透視できる。崇高、神聖、完璧な場としての玉山。舊注諸説によれば玉山は相手の高貴な人格をさす。義山詩では共を助字として頻用するから、これも或いは共に作るのがよいかもしれない。

3・4 この玉山よりほかのどこで、太陽を自由に操るほどの御者が得られよう。ここには天上界に通ずる梯もそなわっている。4句の天ニ上ルノ梯との對應で、3句も日ヲ廻ラスノ馭とよむ。天意は玉山を通してあらわされる——義和を典型として。そして地上の願いもまた玉山を通して天に上達される筈だ。完璧でしかも、天界地上の接点、唯一の場としての玉山。1・2句よりさらにトーンが高まる。

5・6 千金の珠が百斛もかくされている以上、見張りの龍も睡ってはならぬ。千尋の高みで烈しく梢ゆり動かす桐となれば、鳳も棲みたいと切に希う。玉山を自己の棲み家と成し得るものは龍に鳳。玉山は龍鳳を招き寄せ、龍鳳は玉山の完璧さを彌増す。それは同時に、その場が地上に對して閉じられた世界であることをも意味する。5句の百斛、又玄集が萬斛に作るのは誤寫であろうか。

7・8 聞くところによれば（羨ましいことに）、神仙のなかにも蕭史といった風流才子がおって、弄玉に赤い簫のふえの吹き方を教えてやり、鳳聲に似るまでにさせ終ったあと、ちゃんと一緒に手に手をとって、鳳に乗って飛んで行ってしまったそうだが……。

二人の飛び行く先はもとより玉山の桐であろう。しかし、こうした幸運は稀有なことで、俗界の人物はしよせん、玉山には氣まぐれに拾い上げられる存在ではない。蕭史は四〇二頁碧城二章の注参照。高麗本のように赤簫を清商に作るのは蕭史への連想を弱める。

胡震亨がわざわざ「情詞に非ズ」と断るように、舊説ではむしろ情詞たることを前提とした上で寓意を讀みこむが、獵官運動（森を含む諸家）と讀んでも、後宮の諷刺（胡以梅）と讀んでも一應通じはする。兩者ともに拾い上げられる場合だから。しかし、そもそも本作品を情詩とみなすこと自體が基本的に受け入れがたい。やはり「憧憬を込めて描かれた仙境像」（東文研紀要四八山之内論文一〇六頁）の表現であり、自己と幻想の世界、或いは理想の世界との断絶に對する不安を詠み込んでいるように思われる。なお安徽師大本年表は係年していないが、馮浩・張采田は大中二年に係年する。

（茂木信之・井波陵二）

一片 181

一片非煙隔九枝 一片の非煙 九枝を隔つ
蓬巒仙仗儼雲旗 蓬巒の仙仗 雲旗儼し
天泉水暖龍吟細 天泉水暖かに 龍吟細く
4 露晚春多鳳舞遲 露晚春多く 鳳舞遲し

榆莢散來星斗轉 榆莢散り來って 星斗轉じ
桂花尋去月輪移 桂花尋ね去れば 月輪移る
人間桑海朝朝變 人間桑海 朝朝變ずれば
8 莫遣佳期更後期 佳期をして更に期に後れしむる莫れ

校

- 0 唐詩類苑一一二部懷古類
- 2 轡 高麗本・唐詩貫珠「萊」
- 7 人間桑海 高麗本「桑田滄海」 貫珠「人間滄海」
- 8 毛本校注「一本無後四句」

韻

上平五支（枝・移）六脂（遲）七之（旗・期）同用

*

- 1 「和韓錄事送宮人入道³²⁴」九枝燈下朝金殿。三素雲中侍玉樓。
一片 「庾信至仁山銘」峯橫鶴嶺。水學龍津。瑞雲一片。仙童兩人。「盧綸奉和李舍人詠玫瑰花詩」斷日千層艷。孤霞一片光。
〔杜牧三川驛伏覽座主舍人留題詩〕懷恩淚盡霜天曉。一片餘霞映驛樓。〔文破鏡詩〕今朝萬里秋風起。山北山南一片雲。
非煙 「史記二七天官書」若煙非煙。若雲非雲。郁郁紛紛。蕭索綸困。是謂卿雲。卿雲見。喜氣也。〔瑞應圖〕景雲者。太平之應也。一曰慶雲。非氣非烟。五色紛緇。謂之慶雲（玉函山房輯佚書）。〔杜正倫玄武門侍宴詩〕玉池流若醴。雲閣聚非煙。〔顧況送韋秀才赴舉詩〕洛橋浮逆水。關樹接非煙。

九枝 九枝燈をさす。〔漢武帝內傳〕至七月七日。(帝) 廼脩除

宮掖之內。設座殿上。以紫羅薦地。燭百和之香。張雲錦之帳。然

九光之燈。設玉門之環。蒲桃之酒。躬監肴物。爲天官之饌。〔殷

芸小說〕高祖初入咸陽宮。……其尤驚異者。青玉九枝燈。高七尺

五寸。下作盤龍。以口銜燈。燈然則鱗甲皆動。爛炳若列星而盈室

〔西京雜記三では「五枝燈」に作る。〕〔沈約傷美人賦〕拂螭雲之

高帳。陳九枝之華燭。虛翡翠之珠被。空合歡之芳褥。〔梁簡文帝

阻歸賦〕躡九枝而耀景。總六翮而搏風。〔李賀夜來樂〕紅羅複帳

金流蘇。華燈九枝懸鯉魚〔王琦注 鯉魚。燈式。作爲鯉魚形者〕。

2 蓬鬘 義山詩の蓬萊山のイメージは無題114注〔七律集釋稿〕本

學報五三册六二六頁〕參照。

仙仗 〔岑參奉和中書舍人賈至早朝大明宮詩〕金闕曉鐘開萬戶。

玉階仙仗擁千官。〔韓愈晉公破賊回重拜臺司奉和詩〕鸛鷺欲歸僊

仗裏。熊羆還入禁營中。

雲旗 〔離騷〕駕八龍之婉婉兮。載雲旗之委蛇。〔文選三張衡

東京賦〕龍駱克庭。雲旗拂霓。〔李白永王東巡歌十一首之三〕雷

鼓嘈嘈喧武昌。雲旗獵獵過尋陽。〔杜甫玄都壇歌〕子規夜啼山竹

裂。王母晝下雲旗翻。

3・4 〔李嶠風詩〕帶花疑鳳舞。向竹似龍吟。〔張說答李伯魚桐

竹詩〕竹有龍鳴管。桐留鳳舞琴。

3 天泉 〔史記二七天官書〕困敦歲。歲陰在子。星居卯。以十一

月與氏房心晨出。曰天泉。玄色甚明。江池其昌。不利起兵。其失

李義山七律集釋稿(一)

次。有應見昂。〔甘氏星經下〕天泉十星。在鼈東。一曰大海。主

灌漑溝渠之事也。〔宋之問秋蓮賦〕豈知移植天泉。飄香列仙。嬌

紫臺之月露。含玉宇之風煙。〔柳宗元爲王京兆賀嘉蓮表〕香激大

王之風。影耀天泉之水。煥開宮沼。旁映給園。靈貺應期。天龍護

聖。

水暖 〔杜牧初春雨中舟次和州詩〕蒲根水暖鴈初浴。梅徑香寒

蜂未知。

龍吟 〔文選一五張衡歸田賦〕爾乃龍吟方澤。虎嘯山丘〔李善

注 春秋元命苞曰。杓星高則羣龍吟。淮南子〔天文訓〕曰。龍吟

而景雲至。虎嘯而谷風轉。〔又一八馬融長笛賦〕龍鳴水中不見已。

截竹吹之聲相似〔李善注 己謂龍也。〕〔庾信奉和汎江詩〕日落江

風靜。龍吟迥上游。〔李白宮中行樂詞八首之三〕笛奏龍吟水。簫

鳴鳳下空。

4 露曉 〔離騷〕余既滋蘭之九畹兮〔王逸注 十二畝曰曉。或曰

田之長爲曉也。〕又樹蕙之百畝。〔胡以梅注〕竹書紀年。軒轅時。

有鳳凰集。……或止帝之東園。或巢於阿閣。或鳴於其庭。其雄自

歌。其雌自舞。今詩用曉。亦與園可通也。ただし露曉の用例は未

見。

春多 用例未見。

鳳舞 〔山海經一八海內經〕西南黑水之間。有都廣之野。……

鸞鳥自歌。鳳鳥自舞。靈壽實華。草木所聚。爰有百獸。相羣爰處。

〔玉臺新詠九鮑照代淮南王二首之一〕紫房彩女弄明璫。鸞歌鳳舞

斷君腸。〔宋之問太平公主山池賦〕燕姬荆艷今代所稀。鳳舞鸞歌
兮儼欲飛。

5・6 〔玉臺新詠一古樂府隴西行〕天上何所有。歷歷種白榆。桂
樹夾道生。青龍對道隅。鳳皇鳴啾啾。一母將九鵠。顧視世間人。
爲樂甚獨殊。

5 〔春秋運斗樞〕玉衡星散爲榆〔御覽九五六〕。〔擬意586〕蘭叢銜
露重。榆莢點星稠。

榆莢 〔春秋元命苞〕三月。榆莢落〔藝文類聚八八〕。〔李賀殘
絲曲〕榆莢相催不知數。沈郎青錢夾城路。

星斗 〔晉書六元帝紀贊〕馳章獻號。高蓋成陰。星斗呈祥。金
陵表慶。〔沈佺期和中書侍郎楊再思春夜宿直詩〕星斗橫綸閣。天
河度瑣闥。〔張九齡奉和聖製初出洛城詩〕十月回星斗。千官捧日
車。

6 〔淮南子〕月中有桂樹〔御覽九五七。今本淮南子には見えず〕。
〔虞喜安天論〕俗傳月中仙人桂樹。今視其初生。見仙人之足。漸
已成形。桂樹後生〔初學記一・御覽四〕。〔庾肩吾詠桂樹詩〕倩視
今移處。何如月裏生。〔西陽雜俎前集一天咫〕舊言月中有桂。有
蟾蜍。故異書言月桂高五百丈。下有一人常斫之。樹創隨合。人姓
吳名剛。西河人。學仙有過。謫令伐樹。

桂花 〔安世房中歌・桂華〕都荔遂芳。官窠桂華〔漢書二二〕。
〔西陽雜俎續集九〕衛公言桂花三月開。黃而太白。大庾詩〔？〕
皆稱桂花耐日。又張曲江詩〔感遇十二首之一〕。桂華秋皎潔。妄

矣。

月輪移 〔玉臺新詠八劉孝威侍宴賦得龍沙宵月明詩〕鵲飛空繞
樹。月輪殊未圓。〔杜牧洛陽秋夕詩〕清禁漏閑煙樹寂。月輪移在
上陽宮。

7 〔神仙傳七〕麻姑自說云。接待以來。已見東海三爲桑田。自到
蓬萊。水淺。淺于往者會時略半也。豈將復還爲陵陸乎。

朝朝 〔梁簡文帝寒園詩〕綠葉朝朝黃。紅顏日日異。

8 佳期 〔九歌湘夫人〕白蘋兮騁望。與佳期兮夕張〔王逸注 佳
謂湘夫人也。不敢指斥尊者。故言佳也。張。施也。……修設祭具。
夕早灑掃。張施帷帳。與夫人期。歆饗之也。五臣注 佳期謂湘
夫人。言己願以此夕設祭祀。張帷帳。冀夫人之神。來此歆饗〕。
〔文選三〇謝靈運石門新營所住四面高山迴溪石澗脩竹茂林詩〕美
人遊不還。佳期何由敦〔李善注 方言曰。敦。信也〕。〔又二六謝
朓在郡臥病呈沈尚書詩〕良辰竟何許。夙昔夢佳期〔李善注 佳謂
沈也〕。佳期は佳人之約定の期日。九歌の原文は、王逸によれ
ば佳卜期シテとよむので、五臣注はやはり望文生義であらう。こ
ことやや関連する義山の詩に、〔辛未七夕160〕恐是仙家好別離。
故教迢遞作佳期。

* *

胡震亨〔四一三頁參照〕

朱鶴齡

〔補注〕桂花。謂月中桂樹。○陳帆曰。非烟仙仗。龍吟鳳舞。皆

序行樂之事。榆莢二句。言當星移月落時也。末語似勸而實諷。意味深長。

朱彝尊

詩中九枝星月。俱以夜景言。則一片亦泛言夜色朦朧也。○三四。言歌舞之久。五六。言光陰之速。結言宜及時行樂。

何焯

〔讀書記〕

5・6 二句。伏下後期（評本「二句伏下」四字なし）。

〔評本〕此却似無題之屬。緣人間桑海之語。此非陳於津要者也。

○此望援於人。不一引手。而以時來不再之說引動也。

3 歎好音之難得。

4 歎美質之難親。

陸鳴皋

首二句。寫夜來華屋氣象。三四句。言歌舞也。五六句。只在星月兩字。乃夜闌將曉之意。故接以朝朝句。言事境日遷。不可不及早爲歡也。此行樂之詞。而諷意在言外。

姚培謙

此恐遭逢遲暮也。蓬島煙雲。仙真所託。龍吟鳳舞。俯仰優游。以喻君臣際會之樂。誠非倖致。然遇合雖有時。而遲暮亦不可不慮也。況斗轉月移。榆飄桂謝。世事之滄桑屢改。人生之壽命難期。日復一日。豈不虛度一生也耶。楚詞云。恐鵲鳩之先鳴兮。使夫百草爲之不芳。義山之所感深矣。

屈復

一。燈燭輝煌。二。旗仗之盛。三四。歌舞之妙。五六。夜已深矣。七。光陰迅速。八。當及時行樂也。

程夢星

楚詞有云與佳期兮夕張。是此詩注脚。起二句。言隔絕佳期。其人儼在。三四。言其地之深邃。五六。言其時之久遠。七八。密約丁寧之意也。

紀昀

〔詩說下〕此感遇之作。與錦瑟同格。而意又淺焉。亦無自占身分處。

〔評本〕此感遇之詩。與錦瑟詩一種格調。而又加淺俗。

馮浩

戊籤。玉山一片兩章同編而曰。似爲津要之力能薦士者詠。非情詞也。愚謂總望令狐身居內職。日侍龍光而肯垂念。故知急爲援手。皆在屢啓陳情之時。姚云恐遭逢之遲暮。得之矣。

張采田

〔會箋〕此爲當軸者效忠告也。前半寫其得君。後半預憂盛滿。而戒其早自爲所。非感士不遇也。謂指令狐。恐未確。陳帆云。非煙仙仗。龍吟鳳舞。皆序行樂之事。榆莢二句。言當星移月落時也。末語似勸而實諷。意味深長。此解得之。

〔辨正〕義山詩。人皆病其艱深。而紀氏獨謂爲淺俗。見解可謂加人一等矣。可笑可笑。

黃侃

此以篇首二字爲題。仍與無題同。篇中但以神仙事爲喻。則後來以游仙寓意之濫觴。此詩所刺與碧城151 152 153三首及後中元作275一首同。皆爲貴主之爲女道士者作也。此首程以爲艷情。則首二句不可解。中元作紀以爲有求而不得之詞。則首二句亦不可解。○四句春改風。

胡以梅（感懷類）

九枝。燈也。非烟。慶雲。言雲蔽而高光不能相照。如聖明之世。獨不能親於君上。徒見蓬萊仙境。儼然雲旗。可望而不可即。蓬萊亦以殿名雙用。天泉水煖。露晚春多。皆言明時可樂。但雲從龍而龍吟細。君道未隆也。故使鳳凰鳴舞於園尙遲。謂賢不得進。而自負意。五六。嘆時不我與。有斗轉月沈之慮。更不可遲耳。

近代注釋

〔森〕下卷三九九頁。

*

*

*

この詩冒頭から、非煙、蓬萊、仙仗、天泉、龍吟、鳳舞、榆莢、桂花、星斗、月輪等、仙界天界をかたちづくることばが連續し、天仙の世界の雰圍氣づくりに徹している。しかし一首の主意は7・8兩句、俗界に住む男の焦燥への注意喚起であろう。第三聯までに展開する世界の主たるべき相手については、舊説の多くが高位の人物と考えているが、程夢星が珍しく純粹艷情説をとり、また山之内正彦氏も「戀人を仙女に喻し」たとする（「李商隱表現考・斷章」東洋文化研究所紀要四八冊一〇二頁）。ただ、世界の

ちがう相手に對する切實なる戀情が殆どあらわされておらず、そのゆえに、典型的な美人遲暮の作と讀まれても致し方ないかもしれない。

自述

A 艷情 朱彝尊・何・屈・程

B 感遇 胡震亨・姚・紀・馮・胡以梅・森

C 諷刺 陳帆・陸鳴皋・張・黃

寓意

1 煙とも雲ともわかちがたい慶祥の氣が一面に立ちこめるかなた、九つの枝ひとつひとつに燈の輝く大燭臺がぼんやり浮き上って見える（幻想的な夜の景）。九枝燈は主の豪奢ぶりを豫想させるものではあるが、それが直ちに令狐綯を比喩するという（森槐南）のは恣意にすぎよう。

2 蓬萊の仙山に居並ぶ儀仗の隊列、たなびく雲の御旗がいとも嚴か。1句ではまだ判然としなかった華屋の場所だが、ここでは地上と隔絶された世界にあることが明白になる。

3・4 天界に湧き出す泉の水は暖くぬるみ、龍の鳴き聲がかせかく高く聞えている。露にぬれた園は春が濃密に満ち、鳳凰がゆるやかに舞っている。天泉は文字通り天上の泉。龍吟は笛の音の、鳳舞は仙女の華やかな舞踊の暗喩、仙界の歌舞音曲。水暖・春多で、時は春たけなわ、理想郷ののどかな氣分たっぷりである。

5・6 ところで天上に何があるかといえば、まず榆が植えられ、また桂が道の兩側に茂っているのだ（離西行）。榆の實は熟して落ちてばらばらに散った——それがきらめく星たちだが——いま

その星座がぐるりと回轉する。花開く桂の並木を辿って行けばまん圓い月、いまその月も傾く。詩の前半にくり廣げられた天界の夜がここに終りを告げ、朝を迎えんとしている。この一聯を「光陰迅速」の意にとる屈復などの説は當らぬだろう。

7・8 天仙の世界は知らず、われわれ人の世は桑田變じて滄海となるならいで、日ごと日ごとに移り變りが激しいものだから、せっかく天上の佳人とあいびきをきめたその期日には、何とかもう期日遅れになさらないようにしてほしい。毛本の校注は注目すべき内容だが、いわゆる一本は未詳。

馮浩は大中四年に係年するが、張采田および安徽師大年表は不編年。

(西村富美子)

一片 289 《附載》

一片瓊英價動天 一片の瓊英 價は天を動かす
2 連城十二昔虛傳 連城十二 昔虚しく傳う
良工巧費眞爲累 良工 巧費すも 眞に累となる
4 楮葉成來不直錢 楮葉成し來って 錢に直せず

校

0 唐詩類苑一二〇人部感遇類
2 二 高麗本「五」 朱鶴齡本・全唐詩校注「當作五」 稿本旁注「五」

李義山七律集釋稿(一)

4 直 唐晉統籤「值」

韻

下平二仙(天・傳・錢)

*

1 一片 [漢書五四李陵傳] 令軍士持升襦。一半冰(如淳曰。半讀曰片。或曰五升曰半。師古曰。半讀曰判。判。大片也。時冬寒有冰。持之以備渴也)。[南齊書一六百官志光祿大夫條] 詔加金章紫綬者。爲金紫光祿大夫。樂安任遐爲光祿。就王晏乞一片金。晏乃啓轉金紫。不行。[晉書五二郗詵傳] 臣舉賢良對策。爲天下第一。猶桂林之一枝。崑山之片玉。[錢起美楊侍御清文見示詩] 孤光碧潭月。一片崑崙玉。

瓊英 [詩齊風著] 尙之以瓊華乎而(毛傳 瓊華。美石。士之服也)。(又) 尙之以瓊英乎而(毛傳 瓊英。美石似玉者。人君之服也。鄭箋 瓊英。猶瓊華也。正義 釋草云。木謂之華。草謂之榮。榮而不實者謂之英。然則英是華之別名。故言瓊英猶瓊華)。(文選一一何晏景福殿賦) 楯類騰蛇。楨似瓊英(李善注 瓊英。玉英也)。(又一二郭璞江賦(金精玉英) 李善注) 孝經援神契曰。玉英。玉有英華之色也。[白樂天江州赴忠州五十韻] 膾長抽錦纈。藕脆削瓊英。

動天 [虞書大禹謨] 惟德動天。無遠弗届。[文選三七曹植求通親親表] 犬馬之誠。不能動人。譬人之誠。不能動天。
2 [史記八一蘭相如傳] 趙惠文王時。得楚和氏璧。秦昭王聞之。

使人遺趙王書。願以十五城請易璧。〔文選四二曹不與鍾大理書〕
宋之結綵。楚之和璞。價越萬金。貴重都城。有稱疇昔。流聲將來。
……猥以蒙鄙之姿。得觀希世之寶。不煩一介之使。不損連城之價。
既有秦昭章臺之觀。而無蘭生詭奪之誑。〔楊炯夜送趙縱詩〕趙氏
連城璧。由來天下傳。

連城 〔史記一七漢興以來諸侯王年表〕高祖子弟同姓。爲王者
九國。……大者或五六郡。連城數十。置百官。宮觀僭於天子。

虛傳 〔杜甫題鄭十八故居詩〕禰衡實恐遭江夏。方朔虛傳是歲
星。

3 良工 〔孟子滕文公下〕昔者。趙簡子使王良與嬖奚乘。終日而
不獲一禽。嬖奚反命曰。天下之賤工也。……一朝而獲十禽。嬖奚
反命曰。天下之良工也。〔錢起片玉篇〕連城美價幸逢時。命代良工
豈見遺。〔唐書〕太宗嘗謂魏徵曰。玉雖有美質。在於石間。不值
良工琢磨。與瓦礫不別。若遇良工。卽爲萬代之寶〔御覽八〇五〕。

4 楮葉 〔列子說符〕宋人有爲其君以玉爲楮葉者。三年而成。鋒
殺莖柯。毫芒繁澤。亂之楮葉中而不可別也。此人遂以巧食宋國。
子列子聞之。曰。使天地之生物。三年而成一葉。則物之有葉者寡
矣。故聖人恃道化而不恃智巧。この話は韓非子喻老篇・淮南子泰
族訓・論衡自然篇にも見えるが、細工の素材が韓非子・淮南子で
は象すなわち象牙、論衡では木であり、韓非子を引く朱鶴齡系諸
注は非。馮浩注が是。

不直錢 〔史記一〇七灌夫傳〕行酒次至臨汝侯。臨汝侯方與程

不識耳語。又不避席。夫無所發怒。乃罵臨汝侯曰。生平毀程不識
不值一錢。今日長者爲壽。乃效女兒咕囁耳語〔漢書五二灌夫傳ほ
ぼ同じ〕。〔庾信歸田詩〕苦李無人摘。秋瓜不直錢。

朱彝尊

言連城倖售。尺璧非寶。而攻苦揣摩。皆無所用。

何焯

〔讀書記〕本是連城光價。況又良工雕琢。乃偏不值錢。豈能無慨
于中乎〔評本「是」を「自」に、「乎」を「耶」に作る〕。

陸鳴皋

借玉。以比才高而人不識也。

姚培謙

瓊英得價。豈但連城。乃楮葉既成。誰識良工心苦。士之不遇識者。
何以異此。

屈復

絕世奇文。不能見重于時。言識者之難也。

程夢星

此自歎其書記翩翩。枉拋心力也。

紀昀

〔詩說下〕粗淺。

〔評本〕亦激亦鄙。

馮浩

自歎之詞。當在未第時。

張采田

〔會箋〕馮氏云。自歎之詞。當在未第時。

〔辨正〕凡詩中一涉自負自豪處。紀氏便以激鄙詆之。然則詩人必須作卑下語。方爲不激不鄙耶。

* * *

1・2 一塊の、花のように美しい寶玉、その對價は天も魂消るほどの空前絶後。城を十二ずらりと並べて交換もかけられた、かの和氏の璧も比べものにならぬので、あれは昔々に語り傳えられた一向に實のない作り話さ。1句の瓊英は要するに美玉または寶石。英は花だが、別に花びらを連想しなくてよい。2句の十二、史記では確かに十五城で異文もないようだ。しかし義山にはしばしば十二城をいう例があり、これもわざと十二と書いたのかもしれない、「當作五」（朱鶴齡）ときめられるかどうか。稿本の校注は出處不詳、朱鶴齡本から採った可能性もある。なお麗本は意を以て改めたのだろう。

3・4 この寶玉を用いて、すばらしい良い腕の工人が、技巧のかがり盡して彫りあげたら、ほんとに手數わずらわしただけの結果となった。本物と見まがうばかりの楮の葉、それが仕上ってみれば、何と一文にもならぬ——だれひとり價値をみとめくれないのだ。3句の巧費は技巧の費盡の意か。費巧とある方がまだしもよみやすい。

この詩は舊釋いずれも感遇ないし自歎の作とするが、細分すれば、

A 狀況不特定 何焯・陸鳴皋・姚培謙

B 狀況特定 程夢星・馮浩・張采田および屈復

となり、朱彝尊・紀昀は未詳。義山の作品の多くとは異り、感覺的なイメージ創造に重きをおかず、二つの典故をそのまま詩の核心とするなど、唐詩類苑がやはり感遇類に編入する人欲13（七絕集釋稿（一）本學報五〇冊四六二頁）と相通するものがある。列子の話に見られる人爲・巧智の否定と、自然・尊重の思想を形象化したとも考えられ、舊釋に沿って理解するにしても、なるべく狀況を特定しない方がよいであろう。

（荒井 健）

促漏195

促漏遙鐘動靜聞 促漏遙鐘 動靜聞ゆ

報章重疊杳難分 報章重疊 杳として分ち難し

舞鸞鏡匣收殘黛 舞鸞の鏡匣 殘黛を收め

4 睡鴨香爐換夕熏 睡鴨の香爐 夕熏を換う

歸去定知還向月 歸り去り定めて知る 還た月に向う

夢來何處更爲雲 夢み來り何處にか 更に雲と爲る

南塘漸暖蒲堪結 南塘漸く暖く 蒲結ぶに堪え

8 兩兩鴛鴦護水紋 兩兩鴛鴦 水紋を護る

校

0 稿本・唐詩類苑 本篇失收

高麗本題注「此篇擬深宮怨而作」

2 杏 朱鶴齡本・全唐詩校注「一作字」

4 熏 才調集・唐詩鼓吹・唐音「薰」 統籤「噀」

5 定 鼓吹・唐詩品彙・叢刊本「豈」 全唐詩校注「一作豈」

韻

上平二十文（間・分・熏・雲・紋）

*

1 促漏遙鐘 漏鼓・漏鐘による時報の音が或いは氣忙しく或いは

間遠に感じられるのをいう。漏と鐘の並稱は「三國魏志二六田豫傳」年過七十而以居位。譬猶鐘鳴漏盡而夜行不休。是罪人也。以後の文獻にも頻用。促漏は溫庭筠の詩餘に、やや近い表現がある。

〔溫庭筠歸國遙詞〕書堂照簾殘燭。夢餘更漏促。遙鐘是用例未見。

〔大唐六典一〇祕書省太史局〕漏刻生三百六十人 隋置。掌習

漏刻之節。以時唱漏。皇朝因之。皆中小男爲之。轉補爲典鐘典鼓。

典鐘二百八十人 皇朝置。掌擊漏鐘。 典鼓一百六十人 皇朝

置。掌擊漏鼓。〔舊唐書四三職官志二〕凡候夜漏以爲更點之節。

每夜分爲五更。每更分爲五點。更以擊鼓爲節。點以擊鐘爲節。

動靜聞 (1) 動靜の語が動詞聞の對象にかかわる場合の例。〔杜

甫白水縣崔少府高齋三十韻〕泉聲聞復息。動靜隨所激。(2) 動靜の

語が次に來る動詞の主體にかかわる場合の例。〔黃庭內景經心典

章〕心典一體五臟王。動靜念之道德行。義山より時代は下るが、

〔北夢瑣言一一〕唐進士崔昭矩爲狀元。有進士團所由。動靜舉罰。

一日。所由疎失。狀元答之。

2 報章 〔詩小雅大東〕雖則七襄。不成報章（毛傳 不能反報成

章也）。〔文選二六顏延之和謝監靈運詩〕盡言非報章。聊用布所懷。

〔韋迥早發湘潭寄子美詩〕相憶無南雁。何時有報章（唐詩紀事二

四）。

重疊 (1) 手紙が何通も届いているさま。〔張籍祭退之詩〕書札

與詩文。重疊我笥盈。(2) 手紙の枚數が多いさま。〔北夢瑣言四〕

盧相光啓……每致書疏。凡一事別爲一幅。朝士至今效之。蓋八行

重疊別紙。自公始也。(3) 手紙の内容が豊富複雑なさま。〔白樂天

令狐相公與夢得交情詩〕絨題重疊語殷勤。存沒交親自此分。義山

の〔補編七爲滎陽公與前浙東楊大夫啓〕今月二十日。專使林押衙

至。絨詞重疊。贈貺豐厚。次の元稹の用例も同じか。〔魚中素詩〕

重疊魚中素。幽絳手自開。(4) 手紙を何通も相手に送るさま。次の

義山の用例が或いはこれに當るか。〔碧瓦79〕夢到飛魂急。書成

即席遙。……他時未知意。重疊贈嬌饒。

杏難分 〔孟郊憶周秀才素上人詩〕羨爾欲寄書。飛禽杏難倩。

〔溫庭筠投翰林蕭舍人詩〕人間鴛鴦杏難從。獨恨金屏直幾重。

3・4 〔玉臺新詠一徐幹情詩〕君行殊不返。我節爲誰榮。鑪薰闔

不用。鏡匣上塵生。〔李賀蘭香神女廟詩〕深幃金鴨冷。奩鏡幽凰

塵（王琦注 金鴨。香爐。鑄作鴨形。以金塗其上）。

3 舞鸞鏡匣 北堂書鈔卷一三六に引く范泰鸞鳥詩序の故事を用いる。七律集釋稿(一)無題116注(本學報五三冊六三八頁)参照。〔駱賓王代女道士王靈妃贈道士李榮詩〕龍飈去去無消息。鸞鏡朝朝減容色。その他唐詩に頻用。義山にまた〔破鏡138〕玉匣清光不復持。菱花散亂月輪虧。秦臺一照山雞後。便是孤鸞罷舞時。

殘黛 〔白樂天王昭君二首之一〕滿面胡沙滿鬢風。眉銷殘黛臉銷紅。

4 睡鴨香爐 〔李白襄陽歌〕誰能憂彼身後事。金甌銀鴨葬死灰(宋本この二句あり)。香爐にはさまざま動物をかたどったものがあつたのだろう。

夕熏 〔文選一六江淹別賦〕又若君居潛石。妾家河陽。同瓊珮之晨照。共金爐之夕香(李善注 司馬相如美人賦曰。金爐香薰。黼帳周垂)。

5 〔淮南子覽冥訓〕譬若羿請不死之藥於西王母。姮娥竊以奔月(高誘注 姮娥。羿妻。羿請不死之藥於西王母。未及服之。姮娥盜食之得仙。奔入月中。爲月精也)。悵然有喪。無以續之(高誘注 言羿悵然失志。若有所喪亡。不能復得不死藥以續之也)。(江總奉和東宮經故妃舊殿詩)若令歸就月。照見不須疑。

定知 〔玉臺新詠一〇沈約爲隣人有懷不至詩〕言是定知非。欲笑翻成泣。〔庾信詠畫屏風詩二十四首之四〕定知歡未足。橫琴坐石根。〔杜甫寄岳州賈司馬巴州嚴八使君五十韻〕賈筆論孤憤。嚴詩賦幾篇。定知深意苦。莫使衆人傳。以上の諸例、定メテ知ルと

讀んで一應意味は通じるが、知を實字でなく主體不特定の助字とみることも可能である。さらに次の例では定知が下句の助字と對になる。〔白樂天代書詩一百韻寄微之〕仲屈須看蠅。窮通莫問龜。定知身是患。應用道爲醫。〔劉禹錫樂天是月長齋鄙夫此時愁臥：遂爲聯句〕我靜馴狂象。吾餘施衆禽。定知於佛佞。豈復向書淫(夢得)。義山の詩でも知が助字と對する場合は多い。〔茂陵300〕內苑只知含鳳嘴。屬車無復插雞翹。〔正月崇讓宅483〕先知風起月含暈。尙自露寒花未開。〔行次昭應縣524〕魚遊沸鼎知無日。鳥覆危巢豈待風。〔送從翁從東川弘農尙書幕559〕南詔知非謫。西山亦屬驕。なお許渾の七律の用例も參考になる。〔破北虜太和公主歸宮闕〕定是廟謨傾種落。必知邊寇畏驍雄。蔣禮鴻は、白樂天の寄生衣與微之因題封上詩の莫嫌輕薄但知着、猶恐通州熱殺君、および大唐新語卷一一の(李義府)徐對曰、誰向陛下道此、高宗曰、但知我言、何須問我所從得耶、などを例にあげて、「語助詞、沒有意義。」とする(敦煌變文字義通釋一九二頁)。

6 〔文選一九宋玉高唐賦〕昔者先王嘗遊高唐。怠而晝寢。夢見一婦人曰。妾巫山之女也。爲高唐之客。聞君遊高唐。願薦枕席。王因幸之。去而辭曰。妾在巫山之陽。高丘之阻。旦爲朝雲。暮爲行雨。朝朝暮暮。陽臺之下。

7 南塘 〔樂府詩集七西洲曲〕開門郎不至。出門採紅蓮。採蓮南塘秋。蓮花過人頭。〔李賀梁公子詩〕南塘蓮子熟。洗馬走江沙。蒲堪結 〔續述征記〕烏常沉湖(原注 齊人謂湖爲沉)中。有

九十臺。皆生結蒲。云秦始皇遊此臺。結蒲繫馬。自此蒲生則結

(藝文類聚八二)。(玉臺新詠四鮑照採桑詩)早蒲時結陰。晚篁初解籜。〔李賀正月詩〕官街柳帶不堪折。早晚菖蒲勝綰結。

8 兩兩 〔李白古風之七〕兩兩白玉童。雙吹紫鸞笙。〔杜牧鴛鴦詩〕兩兩戲沙汀。長疑畫不成。

鴛鴦 〔詩小雅鴛鴦〕鴛鴦于飛。畢之羅之(毛傳 鴛鴦。匹鳥。鄭箋 匹鳥。言其止則相耦。飛則爲雙。性馴耦也)。

水紋 〔梁元帝晚景遊後園詩〕日移花色異。風散水紋長。〔許敬宗奉和秋日即目應制詩〕鵲度林光起。鳬沒水文圓。〔張籍朱鷺曲〕避人引子入深塹。動處水紋開灩灩。

* *

胡震亨(情詞類)

朱鶴齡

高棟曰。此詩擬深宮怨女而作。

8 道源注 言縱如姮娥入月。終是獨居。神女爲雲。徒成幻夢。豈若南塘之鴛鴦。長匹不離哉。

朱彝尊

作閨思解。何其明了。而必曰宮怨也。

何焯

〔評本〕

3·4 二句。自朝至夕。

5·6 王金珠子夜(冬)歌。懷情入夜月。含笑出朝雲。(朱鶴齡)

注(引淮南子)非是。

7·8 小馮云。不言之妙。

陸鳴皋

此宮怨也。報章句。言無心分理箋奏也。五六句。用姮娥神女事。輕點入化。可爲使事者之法。結是羨物變棲意。

姚培謙

此亦是悼亡之作。首句。展轉不睡也。次句。檢生前往來酬唱之詞也。報章雖在。鏡匣徒收殘黛。香爐已換夕熏。死者有知。竟不知何處託寄。因又自解曰。死則死矣。何所託寄哉。歸去而漫云向月。夢來而猶託爲雲。徒虛語耳。竟不知南浦鴛鴦。暖波同宿之猶可據也。真是情癡腸斷語。

屈復

0 此題與碧城·玉山同。

促漏遙鐘。夜深也。動靜聞。寂寥也。所歡之報章。意欲分之。而重疊難分。心煩意亂也。三四。加倍寫無聊之甚也。五六。終是獨居。究非實境。

程夢星

高棟謂此詩擬深宮怨女而作。長孺取之。非也。通篇情景。何與宮禁。不過爲促漏報章數字誤耳。愚見乃托於閨情。以寄幽怨。蓋屢啓陳情綯。不見省之時也。起句。憶其高居禁苑。次句。謂已屢次上書。三句。喻幕府初罷之時。四句。喻待命望恩之久。五句。自悲又將入幕。六句。自歎無可結歡。七句。言得地可以自遂。八句。

言終身願共相依也。露書。知論高棟所見之非。是矣。然以爲人間情事。則視爲艷詩。又非。

紀昀

〔詩說下〕對面作結。妙有興象。前六句。體不高耳。○問高廷禮說此詩如何。曰。此說長孺取之。然定爲宮詞。亦只據第二句。其實所注亦牽合也。午橋從姚旅露書。定爲悼亡。然第二句究竟說不去。蓋此詩摘首二字爲題。亦是無題之類耳。

〔評本〕此摘首二字爲題。報章自用毛詩語。長孺注牽合掌書宮女。以就高棟深宮怨女之說。似爲未妥。午橋從姚旅露書。定爲悼亡。與前四句亦碍。

馮浩

徐氏（逢源）以寄意令狐。則次句屢啓陳情。或屢爲屬草也。三四夜宿。五謂歸惟獨處。六謂更何他求。結則望其終能歡好也。或作摹繪艷情看。亦得。高棟以爲宮怨。似而非矣。

張采田

〔會箋〕徐氏謂寄意令狐。是也。首句。音信常聞。次句。書函屢啓。三言我之摧殘如故。四言彼之名位又升。暗用荷令事也。五卽華星相送（無題116）之意。六卽何處哀箏（無題117）之意。結盼好合或當不遠也。蓋屢啓陳情。漸有轉圜之望。其後博士之除。當於此中消息之。

郝天挺

此篇擬深宮怨女。恨不如禽鳥猶有匹也。

5·6 詩意謂恨不能如嫦娥奔月。又不能如巫娥夢接荆王也。

高棟

此篇擬深宮怨女而作。

顧璘（唐晉一〇批）

此篇中聯。轉不堆積。蓋初聯夕景。次聯言人事。不曉何故作一結如此。

廖文炳

此詩言宮女侍寢後不得再幸而怨之也。故以促漏爲題。首言促漏轉而天將曉。殿鍾已鳴而動靜皆聞之矣。動靜如雲已起與未起者。斯時君視朝而報章奏疏重疊。君王苦理治之難。何暇猶幸乎。前此時宮女鏡收殘黛而加新飾。爐換夕薰而炷新薰。皆望君王之幸。至此已知其不來矣。歸去則如羿妻奔月。不終夫婦之緣。夢來亦猶楚王空歡。無復雲雨之樂。羿妻夫婦之緣不終。比已先幸而不得再之意。不重在仙。上言既無長生之福。又無人世之樂也。末云。況且南塘春來漸暖。而蒲莖結實。鴛鴦戲樂。于水最幸。不得如此鳥之得偶也。寧不傷懷哉。

胡以梅（宮詞類）

此詩雖語皆艷質。尋繹脉理。代宮人吟怨曠也。促漏。言漏之易過。漏刻投籤。宮中之事。遙鐘外來。已見宮殿深沈。上四字。便有宮中神情。難移別處。動靜聞者。言其相續不斷。而報章重疊。至尊一時難卽裁決。所以久侍御筵。夜深方退。收殘黛而改妝。換爐香以薰夕。鸞鏡。傷孤也。睡鴨。欲眠也。歸去。是從侍御初罷時動

念。夢來。從將睡時作想。如嫦娥之獨處。無襄王之入夢。豈知何處。皆怨之辭。深宮之苦有如是。以視人間南塘游玩。各有匹耦之樂。爲何如哉。

近代注釋

〔森〕下卷三四七頁。〔鈴木〕七二頁。

* * *

作品の主人公を(A)女性とするか(B)男性とするかによって諸注釋を區分できる。

A₁ 宮怨說 郝天挺・高棟・廖文炳・朱鶴齡・陸鳴皋・胡以梅

A₂ 閨怨說 朱彝尊・馮浩(或說)〔寄托を言わず〕

程夢星・徐逢源・馮浩・張采田〔寄托あり〕

B₁ 悼亡說 姚培謙

B₂ 艷情說 森・鈴木

なお道源は恐らくA説であるうが、何焯・屈復・紀昀は未詳。

1 動靜聞という表現がよく分らないが、もし杜詩をふまえているのだとすれば——間斷なく滴る漏刻の水音のみの靜寂、ときたま遙かに鳴りひびく鐘の音、その音による靜寂の中斷、動と靜の繰り返しが、夜明け近い今まで眠られぬ耳元に聞えつづける。胡以梅・鈴木、いずれも動靜を聞の對象としての漏鐘の音にかけている。その對象を、主人公の相手の動向(廖文炳) 音信(張采田) 氣配(森)、とするのには賛成しがたい。これとは別に、「動靜ニ聞ユ」とよみ、主人公が身動きしても靜止していても常に、漏鐘

が聞えつづける、とは考えられないか。

2 相手の返書は——

(1)何通も何通も積みかさなって(舊説)、(2)何枚も何枚もにわたって書かれていて、(3)いろいろあれこれと書かれていて——

何とか筋道だてて理解しようとしても、くらいとばかりにつつまれたようで、どうにも意味がつかめない、それほど我が胸は亂れに亂れる。主人公が分析せんとして苦しむ對象は、やはり報章であるう。その報章を主人公の手書とする、程夢星などの寄托説は成り立ちにくい。杏難分の方は難解だが、杏を字に改めて(鈴木)、別に文意が通りやすくなるまい。

2句における主人公と相手との隔絶感、5・6句に至ってさらに明確に示される。

3・4 (1)A説のように主人公を女とするならば、或いはB説にしても男が相手の情景を想像して述べるとするならば、この一連は孤閨の現況で、孤鸞の舞い姿をかたどった鏡のはこには古くなつた黛をしまい、眠れる鴨の形に雕つた香爐に夕方また香を夜のとり換える(ことだろう)。

(2)だが、3句の殘黛は白詩の用例によれば殘粧と同じく、實體(化粧品)でなく形状(くずれた化粧ないし化粧くずれた顔)をさしている。そこで二句の主體は男性となり、鏡のはこにはもう化粧の薄れかかった顔すなわちあの女のかつての面影がのこるばかり、以前同様夕方になればまた香を取り換えるのだが。

5・6 ここは主人公を男性と考えた方が明かに解しやすい。もと
もと月の世界の住人だったあの女はきつとまた月へと歸って行っ
て、手の届かない存在となつてしまつたのだらう——定知の知を
通例の訓に従つて實字とすれば——私にはそれがはつきり分つて
いる。以前は私のもとに姿を見せてくれたけれど、今ごろはいっ
たいどこで、またしても巫山の神女のように雲となり雨となつて
契りかわす夢を見ていることやら。去・來は相互置換も可能な輕
い助字であり（例えば題僧壁7の第二聯、大去便應欺粟粒、小來
兼恐隱針鋒）、「夢ニ來ル」と來を重くとする森槐南などのよみはお
かしい（鈴木譯あやまらず）。5句の定字、鼓吹その他は豈に作
るが、集本の多くに従つておく。

7・8 おだやかなひざしのおふれる南の池、日ごとにあたたかに
なつて水べの蒲（李賀の詩によれば菖蒲）も手綱むすべるほどに
のびた頃、そこには睦まじい番いの鴛鴦たちが、ひとくみごとに
水面にできた輪をじつとまもっている。ひとつの波紋の中におさ
まっている鴛鴦が、これまでの句を通して展開された隔絶感と對
比される。

既成の分類、宮怨・閨怨・悼亡、いずれの場合もシチュエーシ
ョンが明確な秩序をもつて提示される。この詩をそれらの類型に
あてはめようとする舊注諸家の説すべて矛盾が生じ、中ではB₁姚
培謙説が比較的無理なく通ずるのだが、5・6句は悼亡の語氣に
ふさわしくない。結局B₂、思う相手に會えぬ男性の立場から歌わ

れた、純粹艷情説に落着く。なお、閨怨に寄托説をとる馮浩・張
采田は、それぞれ大中三年および五年に係年する。安徽師大年表
では係年せず。

（川合康三・横山 弘）

流鶯 322

流鶯漂蕩復參差 流鶯漂蕩 復た參差

渡陌臨流不自持 陌を渡り流れに臨み 自ら持せず

巧轉豈能無本意 巧轉豈能く 本意無からんや

4 良辰未必有佳期 良辰未だ必ずしも 佳期有らず

風朝露夜陰晴裏 風朝露夜 陰晴の裏

萬戸千門開閉時 萬戸千門 開閉の時

曾苦傷心不思聽 曾ち苦だ心を傷め 聴くを思わず

8 鳳城何處有花枝 鳳城何れの處にか 花枝有らん

校

0 唐詩類苑一九六鳥部鶯類

1 蕩 金聖嘆本「泊」

2 流 金聖嘆本「風」

3 轉 錢寫本・叢刊本・稿本「轉」

7 心 錢寫本・叢刊本・稿本・統籤・朱鶴齡本・全唐詩・高麗本

「春」

思 統籤「忍」 朱鶴齡本・全唐詩「忍」作「思」 毛本校注「一

作忍」稿本旁注「忍」

韻

上平五支（差・枝）七之（持・期・時）同用

*

1 流鶯

〔玉臺新詠九沈約八詠二首臨春風〕搖綠帶。抗紫莖。舞春雪。雜流鶯。〔沈約三日率爾成篇詩〕開花已匝樹。流鶯復滿枝

〔藝文類聚四〕。〔駱賓王春晚詩〕落葉翻風去。流鶯滿樹來。〔賈

至早朝大明宮呈兩省僚友詩〕千條弱柳垂青瑣。百轉流鶯遶建章。

義山にまた〔池邊397〕玉管度灰細細吹。流鶯上下燕參差。

漂蕩

〔曹植曹仲雍誄〕流塵飄蕩魂安歸〔文選三一劉鑠擬行行重行行詩李善注〕。〔南齊書七東昏侯紀〕八月乙巳。鑾京邑遇水。

資財漂蕩者。今年調稅。〔杜甫遺興詩五首之四〕蓬生非無根。漂

蕩隨高風。

參差

〔廣韻下平二十一參字注〕參差。不齊貌。亦作參。〔詩周南關雎〕參差荇菜。左右采之。〔玉臺新詠九簡文帝雜句從軍行〕

遷迤觀鵝翼。參差覩鴈行。〔杜甫彭衙行〕參差谷鳥吟。不見遊子

還。

2 渡陌

〔文選二七曹操短歌行〕越陌度阡。枉用相存〔李善注應邵風俗通曰。里語云。越陌度阡。更爲客主〕。〔溫庭筠張靜婉采

蓮曲〕麒麟公子朝天客。珂馬璫璫度春陌。

臨流

〔文選二六陶淵明夜行塗口詩〕叩棹新秋月。臨流別友生。〔李白紫騮馬詩〕臨流不肯渡。似惜錦障泥。

不自持 〔文選一九曹植洛神賦〕收和顏以靜志令。申禮防以自

持。〔又二六任昉贈郭桐廬詩〕望久方來萃。悲歎不自持。〔玉臺新

詠五沈約雜詠五首之一春詠〕楊柳亂如絲。綺羅不自持。〔盧思道

採蓮曲〕曲浦戲妖姬。輕盈不自持。義山にまた〔曲池132〕日下繁

香不自持。月中流艷與誰期。

3 巧囀

〔禽經〕鶯以喜囀。鳥以悲啼。……鳴也〔埤雅六鶴條〕。〔祖詠聞百舌鳥詩〕高飛憑力致。巧囀任天姿。

本意 〔後漢書竇融列傳一三〕〔光武帝〕詔報曰。……京師百

僚。不曉國家及將軍本意。多能採取虛僞。誇誕妄談。令忠孝失望。

傳言乖實。〔李白贈別鄭判官詩〕浮雲無本意。吹落章華臺。

4

〔文選二六謝朓在郡臥病呈沈尚書詩〕良辰在何許。夙昔夢佳期

〔李善注 佳謂沈也。言會面良辰。竟在何許。而令夙昔空夢佳期。阮籍詠懷詩曰。良辰在何許。凝霜沾衣襟。許。猶所也〕。

佳期

〔文選二七謝朓晚登三山還望京邑詩〕佳期悵何許。淚下如流霰。また一片181注（四一八頁）參照。

5 風朝

〔謝靈運山居賦〕其竹則二節殊葉。四苦齊味。……露夕沾而悽陰。風朝振而清氣。〔王融迴文詩〕風朝拂錦慢。月曉照蓮

池。〔張九齡使還都湘東作〕風朝津樹落。日夕嶺猿悲。〔白樂天和

裴常侍薔薇架詩〕風朝舞飛燕。雨夜泣蕭娘。

露夜 用例未見。

陰晴

〔王維終南山詩〕分野中峰變。陰晴衆壑殊。〔杜甫江閣對雨詩〕南紀風濤壯。陰晴屢不分。

6 萬戶千門

〔史記一二孝武本紀〕於是作建章宮。度爲千門萬戶。

〔文選一班固西都賦〕內則別風之嶢嶢。眇麗巧而聳擢。張千門而立萬戶。順陰陽以開闔。〔李善注〕三輔故事曰。建章宮。東有折風闕。闕中記曰。折風。一名別風。……漢書〔郊祀志〕曰。建章宮。

度爲千門萬戶。〔駱賓王帝京篇〕三條九陌麗城隈。萬戶千門平旦開。〔王維聽百舌鳥詩〕萬戶千門應覺曉。建章何必聽鳴鑼。

開閉

〔劉允濟天賦〕馮理亂而倚伏。候昏明而開閉。〔李華含元殿賦〕其南則丹鳳啓途。遐矚荆吳。十扇開閉。陰陽睢盱。

7 傷心

〔文選二三阮籍詠懷詩十七首之一〕孤鴻號外野。朔鳥鳴北林。徘徊將何見。憂思獨傷心。〔王昌齡古意詩〕欲暮黃鸝轉。

傷心玉鏡臺。

8

〔隋唐嘉話中〕李義府始召見。太宗試令詠鳥。其末句云。上林多許樹。不借一枝棲。帝曰。吾將全樹借汝。豈惟一枝。また大唐新語七知微篇にも見える。

鳳城

〔李嶠人日侍宴大明宮應制詩〕鳳城景色已含韶。人日風光倍覺饒。〔杜甫夜詩〕步檐倚仗看牛斗。銀漢遙應接鳳城。〔又送

覃二判官詩〕錢爾白頭日。永懷丹鳳城。〔九家注〕趙云。丹鳳城。指言長安帝城也。秦穆公女弄玉吹簫。鳳集其城。因號丹鳳城。李

嶠城詩云。獨下仙人鳳。羣鸞御史烏。正用此事。而公詩亦屢使。

〔梁戴嵩煌煌京洛篇〕黑龍飲過渭。丹鳳俯臨城。〔類聚四二〕。

花枝

〔謝朓別江水曹詩〕花枝聚如雪。垂藤散似網。〔劉孝威望隔牆花詩〕隔牆花半隱。猶見動花枝。

朱彝尊

良辰句。何以貼鶯。讀者思之。

何焯〔評本〕0 寓意。

姚培謙

此傷己之飄蕩無所託。而以流鶯自寓也。渡陌臨流。全非自主。然聽其巧囀之聲。豈無迫欲自達之意。所恨者佳期之未可卜耳。試看風朝露夜。陰晴不定。萬戶千門。開閉隨時。無日不望佳期。無日得遇佳期。鳳城一枝。不知何時得借。傷春之音。宜我之不忍聽也。

屈復

流鶯之飛鳴來去。風露陰晴。無處不到。我亦傷春者。不忍聽此。

恐鳳城中無處有花枝耳。

程夢星

此亦借端以自歎也。起句漂蕩字。結句傷春字。是正義。首句。言一身漂蕩無定。次句。言去住莫能自主。三句。言求其友生之意。四句。言懷我好音之難。五句。言天時之莫可端倪。六句。言地利之無可栖託。七句。承上文風朝露夜。言屬聽之人。亦不忍其傷春。八句。承上文萬戶千門。言花開之時。竟不知其何處也。

紀昀

〔詩說下〕前六句。將流鶯說做有情。七句。打合到自己身上。若合若離。是一是二。絕妙運掉。與蟬詩18同一關捩。但格力不高。聲響覺靡耳。

〔評本〕前六句。以鶯寓感。末乃結出本意。運意與蟬詩相類。但風格不及耳。

馮浩

領聯入神。通體悽惋。點點杜鵑血淚矣。亦客中所賦。

5・6 此聯追憶京華鶯聲。故下接曾苦。

〔補注〕

4 錢木庵（良擇）曰。此句何以貼鶯。讀者思之。若以言解。則索然矣。

張采田

〔會箋〕馮氏云。領聯入神。通體悽惋。點點杜鵑血淚矣。亦客中所賦。

〔辨正〕此種含思宛轉。獨絕古今之佳篇。自來無人敢議。惟盲目者方不能領其妙耳。紀氏專守坊刻三百篇中李杜王韋諸詩。以爲獨一無二之風格。宜其以義山爲不及也。○亦寓客中無聊。陳情不省之慨。味其詞似在京所作。豈大中三年春間耶。此等詩當領其神味。不得呆看。若泥定爲何人何事而發。反失詩中妙趣矣。讀玉谿集者。當於此消息之。

黃侃

此首借流鶯以自傷飄泊。末二句。言正惟已有傷春之情。所以聞此鶯啼。不禁爲之代憂失所也。

金聖嘆

此悲羣賢不得甄錄。遂致各自分散。而特托流鶯以見意也。漂泊者。

獨言其一人之失所。參差者。合言其諸人之乖隔。度陌臨風不自持者。又與各各人。分言其南北東西。不能自擇。蓋糊口維艱。則托身隨便。此皆出於萬無可奈。而不能以又深責之者也。三四。因與曲折代陳。言其學成來京。豈能無望朝廷。然而君明相賢。未審何日召見也。

風朝露夜之爲言。無朝無夜也。萬戶千門之爲言。無開無閉也。此二句。寫流鶯之悲鳴不已也。末又結以曾苦傷心之二句者。自憶昔日未遇。亦復深領此味。至今回首思之。猶自神傷不安也。

近代注釋

〔安徽師大〕二〇一頁。〔陳〕七二頁。

* * *

珍しく殆んど白描の詩である。新舊の諸説また、流鶯漂蕩のさまに義山が自己を詠みこんだ、という方向ではほぼ一致する。

1・2 流轉遷移がさだめの鶯は枝から枝へ木から木へ、さすらうごとく、さらには目まぐるしく飛びうつりまた飛びうつる。小路をいくつ越え、流れにいくつ出會ったか。少しのまもじつとしてられない。我と我が身を持ちあつかいかねる、だがそれは、自ら望んでのことではない。

3・4 そのすばらしく巧みなさえずりの奥に、秘めた深い思いがこめられていない、ということがありえようか。だけれども、おだやかなよき日とて、（流鶯の思いのとおり）よきちぎりがかなえられるときは限らないのだ。

5・6 風吹く朝、露むすぶ夜、くもる日、はれる日。宮居の千の門、萬の扉、その開く時、閉ざされる時。流鶯は、いつだって、さえずり、とびまわるのだ。開閉時、金聖嘆は開いても閉っても四六時中、と解するが、やはり開く時と閉る時、朝な夕なの意であろう。

7・8 さてこの私こそ、とても手ひどく胸を傷められてしまった。まだこの上流鶯の聲をじっと聴こうとは思わない。鳳の城といわれる廣大壯麗な都長安の一體どこに、この鳥のとまるべき花の一枝があるだろうか。7句の曾をカッテとよむならば、5・6句だけを過去のこととしたり（馮浩）、7句初四字だけを過去のこととしたり（安徽師大・陳永正）する結果になる。黃侃の説の方がまさる。七律句頭の曾を乃と解すべき例は他に、曾是寂寥金燼暗（無題二首之一366）・曾省驚眠聞雨過（中元作275）。苦をハナハダとよむのは詩語解卷下・語辭匯釋卷二參照。こうしたよみに關連して、傷心の心も當然底本（および毛本）のまま、春に改める必要はない。

流鶯、不自持、佳期、花枝といった措辭からは艶詩的雰圍氣を汲みとることもできる。3句の本意は連れ合いを求める戀心、4句の佳期は戀人との出會い等々。傷心をもし傷春に作るならば、艶詩の色彩はより強まろう。

馮浩は、客中所賦と言うが、むしろ張氏辨正の、味其詞、似在京所作、に従うべきであろう。しかし辨正の大中三年説は根據が

ない。馮浩および張氏の年譜會箋、安徽師大、いずれも不編年。

（松尾良樹）

昨日 369

昨日紫姑神去也 昨日紫姑の神去れり

今朝青鳥使來除 今朝青鳥の使來ること除し

未容言語還分散 未だ言語を容れざるに 還た分散

4 少得團圓足怨嗟 團圓を得る少くして 怨嗟足し

二八月輪蟾影破 二八月の月輪 蟾影破れ

十三絃柱鴈行斜 十三の絃柱 鴈行斜なり

平明鐘後更何事 平明の鐘の後 更に何事がある

8 笑倚牆邊梅樹花 笑いて倚る牆邊 梅樹の花

校

0 唐詩類苑七九人部懷思類

1 也 高麗本「了」

2 來除 高麗本「還來」

7 鐘 錢寫本・毛本「鍾」

8 邊 毛本「匡」^{一作} 錢寫本「邊」を「匡」に改め更に「邊」

に改む 朱鶴齡本・全唐詩校注「一作匡」 稿本旁注「匡」

高麗本「匡」

韻

下平九麻（除・嗟・斜・花）

1・2 「玉臺新詠八甄固奉和世子春情詩」昨晚。寒簾望。初逢雙鵲歸。今朝見桃李。不啻數花飛。〔又一〕沈約早行逢故人車中爲贈詩「殘朱猶暖曖。餘粉上霏霏。昨宵何處宿。今晨拂露歸。」

紫姑・青鳥を對させた義山詩は他に、〔聖女祠326〕消息期青雀。逢迎異紫姑。

1 紫姑 〔異苑五〕世有紫姑神。古來相傳云。是人家妾。爲大婦所嫉。每以穢事相次役。正月十五日感激而死。故世人以其日作其形。夜於廁間或猪欄邊迎之祝曰。子胥不在〔原注 是其婿名也〕。曹姑亦歸〔原注 曹即其大婦也〕。小姑可出戲。捉者覺重。便是神來。莫設酒果。亦覺貌輝輝有色。即跳躑不住。能占衆事。卜未來蠶桑。又善射鈎。好則大舞。惡便仰眠。平昌孟氏恒不信。躬試往投。便自躍茅屋而去。永失所在也。〔荆楚歲時記紫姑條〕正月十五日。其夕則迎紫姑以下。劉敬叔異苑云。紫姑。本人家妾。……迎之下呪曰。子胥不在〔原注 云是其婿〕。曹夫人已行〔原注 云是其姑〕。小姑可出。〔下略〕〔說郛二五〕なお北宋の文昌雜錄卷一、九月工部郎中范子奇云々の條に、當時の紫姑神を迎える風俗を記し、注に異苑を引く。

也 〔唐音癸籤四用字條〕詩用助語字。非法也。惟排律長篇。或間有之〔原注 如杜老〔遺悶詩〕餘力浮於海。端憂問彼蒼。尙不覺用語助字。至王・孟〔汎前陂詩〕暢以沙際鶴。兼之雲外山。及〔雲門寺西符公蘭若詩〕依止此山門。誰能效丘也之類。則惡矣。

豈可妄傲。王維にはまた〔戲贈張諲詩三首之二〕宛是野人也。時從漁父魚。こと用字の最も近い場合は〔徐凝同施先輩見寄新詩二首之二〕紫河車裏丹成也。卓荦枝頭早晚飛。料得仙宮列仙籍。如君進士出身稀。

2 青鳥 戀の使として唐詩に頻見する。無題150青鳥注〔七律集釋稿〕本學報五三冊六四六頁〕參照。

除 〔文選二〇謝朓和王主簿怨情詩〕徒使春帶睵。坐惜紅粧變〔李善注 除。緩也〕。

3 言語 〔玉臺新詠九鳥孫公主歌詩序〕漢武元封中。以江都王女細君爲公主。嫁與烏孫昆彌。……歲時一再會。言語不通。公主悲愁。〔又五沈約少年新婚爲之詠〕丰容好姿顏。便僻工言語。

分散 〔陶淵明雜詩十二首之一〕人生無根蒂。飄如陌上塵。分散逐風轉。此已非常身。〔高適別韋參軍詩〕歡娛未盡分散去。使我惆悵驚心神。

4 團圓 〔1〕〔文選二七班婕妤怨歌行〕裁爲合歡扇。團圓似明月。〔梁簡文帝當壚曲〕十五正團圓。流光滿上蘭。〔2〕〔杜甫又示兩兒詩〕團圓思弟妹。行坐白頭吟。〔白樂天自詠老身示諸家屬詩〕家居雖濩落。眷屬幸團圓。

怨嗟 〔文選四四陳琳爲袁紹檄豫州〕是以兗豫有無聊之民。帝都有吁嗟之怨〔李善注 家語。孔子曰。今人之言惡者。比之於桀紂。民怨其虐。莫不吁嗟。〕〔何遜南還道中詩〕握手分岐路。臨川何怨嗟。〔杜甫舍弟觀赴藍田喜寄詩三首之三〕比年病酒開涓滴。

弟勸兄耐何怨嗟。

5 二八月輪

〔文選三〇鮑照翫月城西門廡中詩〕三五二八時。千里與君同。〔謝靈運怨曉月賦〕昨三五合既滿。今二八合將缺。〔類聚一〕。〔庚信象戲賦〕月輪新滿。日暈初圓。

蟾影

〔張說新都南亭詩〕碧潭秀初月。素林驚夕棲。褰幌納蟾影。理琴聽猿啼。〔杜牧張好好詩〕洞閉水聲遠。月高蟾影孤。

6

〔朱鶴齡補注〕雁行斜。言箏柱斜列。如雁飛也。古詩。刻成箏柱雁相參。鮑溶風箏詩。雁柱虛連勢。鸞歌且墜空。〔李遠贈箏妓伍卿詩〕座客滿筵都不語。一行哀鴈十三聲。

十三絃柱

〔傳玄箏賦〕世以爲蒙恬所造。今觀其器。上崇似天。下平似地。中空準六合。絃柱擬十二月。〔隋書一五音樂志下〕雅樂合二十器。……絲之屬四。……四曰箏。十三絃。所謂秦聲。蒙恬所作者也。〔通典一四四箏條原注〕今清樂箏。並十有二絃。他樂皆十有三絃。軋箏。以片竹潤其端而軋之。彈箏。用骨爪長寸餘以代指。〔岑參秦箏歌〕汝不聞秦箏聲最苦。五色纏弦十三柱。

鴈行

〔詩鄭風大叔于田〕兩服上裏。兩驂鴈行。〔禽經張華注〕鴻。雁屬。大曰鴻。小曰雁。飛有行列也。〔李端宿瓜洲寄柳中庸詩〕月魄正出海。雁行斜上雲。〔劉禹錫傷秦姝行〕長安二月花滿城。插花女兒彈銀箏。……青牛文梓赤金簧。玫瑰寶柱秋雁行。

7

平明鐘後 平明すなわち五更は、義山詩では失意の戀人の時間であることが多い。〔初起53〕五更鐘後更廻腸。等々。七絕集釋稿(二)本學報五一册五八一頁參照。

更何事

〔張籍楊柳送客詩〕君見隋朝更何事。綠楊南渡水悠悠。

8

〔李白口號吳王美人半醉詩〕西施醉舞嬌無力。笑倚東窓白玉牀。〔又寄東魯二稚子詩〕嬌女字平陽。折花倚桃邊。〔杜甫祠南春望詩〕山鬼迷春竹。湘娥倚暮花。

牆邊

用例未見。

梅樹花

〔庚信詠畫屏風詩二十四首之三〕昨夜鳥聲春。驚聞動四鄰。今朝梅樹下。定有詠花人。

胡震亨(情詞類)

何焯

〔評本〕落句。亦用趙師雄事。非始於龍城錄也。

5

團圓少。
分散長。

徐德泓

此去職之詩。亦比體也。首聯。喻已失而不得也。三四句。言其不久。第五句。即從上團圓字內鉤出。月至十六則缺矣。第六句。乃離絃別意。結謂景闌人散而無聊也。

陸鳴皋

人知睽隔之足怨嗟。而不知少得團圓之怨嗟更深也。結有哭不得而笑意。

姚培謙

此感人心判合不可必也。昨日輕離。今朝無信。去不知其何以去。

來不知其何時來。大抵蟾影一破。必無重圓之理。雁柱本單。那有復雙之時。平明鐘後。惟有梅樹無心。笑倚牆邊而已。浪藥浮花。其足戀耶。此即衛詩終風之意（邛風終風的小序にいう。終風。衛莊姜傷己也。遭州吁之暴。見侮慢而不能正也）。

屈復

古詩。刻成箏柱雁相參。言箏柱斜列。如雁飛也。二八。十六夜月缺時也。十三絃。不成雙也。笑倚梅花。望其來也。與去字相映。

程夢星

此亦惜別之詞。別無寄託。

紀昀

〔詩說下〕亦無題之類。起二句拙。三四句鄙。結亦鄙。

〔評本〕亦無題之類。語多近鄙。

馮浩

陸（崑曾）曰。一夜之間。百感交集。及至平明。自覺無謂。末句。

淡語自深。○浩曰。更字慘極。味乃不窮。詩爲元夕次日作。三句。

憶匆匆往還。四句。歎歡聚甚少。五取破鏡之義。六指哀箏之調。

皆互見爲令狐所賦諸詩中。結則極狀無聊也。考其元宵在京之跡。

則大中四年。

張采田

〔會箋〕明日者。昨日之明日。昨日者。由明日而追溯昨日也。首句形神雖接。次句好音不來。未容句。水去雲迴之恨。少得句。言能見一面。足慰相思。然已不可多得矣。後半。極狀癡情悵望景況。

二八月輪。團圓時少。十三絃柱。分散時多。與上二篇（無題139・明日46）同參。眞字字血淚矣。紫姑。正月十五故事。詩蓋作於大中年元夕後一日也。馮編四年。誤。

〔辨正〕此篇寄意令狐屢啓陳情不省。故託艷體以寓慨。宛轉情深。字字血淚。眞玉谿生平極用意之作。措辭淒痛入神。絕無一點塵俗氣。紀氏必目以語多近鄙。甚非通人論議也。○昨日者。記除夕事也。蓋元旦所作。攷義山元旦在京之跡。只大中三年。蓋大中二年秋末。赴選入京。因而陳情。若大中四年。已在徐幕。大中六年。已在梓幕。皆無此情事矣。馮氏誤系之大中四年。已駁正於前。○紫姑係正月十五日故事。此蓋記元夕事。詩爲十六日所作。故題曰昨日也。疑元夕子直來謁義山。匆匆而去。所謂未容言語還分散也。少得句。言能見一面。足慰相思。已不可多得矣。青鳥。言好音不來也。後四句。極狀癡情悵望之景況。二八月。團圓日少。十三句。分散時多。當與謁山402一篇同參。眞一字一淚矣。又有明日46一首。亦與此製題相同。

近代注釋

〔森〕下卷三九〇頁。〔陳〕七八頁。

* * *

この詩は科學院文學研究所編『唐詩選』（一九七八・北京）に收載されるが、その題注に「這是愛情詩、用開端兩字標題、并非完全賦詠、昨日の情事。」とあるとおりで、さらにいえばこの昨日は特定の・具體的な何年何月何日をさすのではなく、不特定

の・全く一般的な意味での昨日なのである。

1・2 昨日、紫姑——わたしの女神は束のまに去ってしまったのであります。今日、あなたの便りとどける青鳥の使いはいつまでたつてもやって来ません。今朝を字義どおりけさと取るべきでない。也の使用はむろん破格だが、義山詩の助字は量的に質的に、到底無視できぬほどの重要な役割を荷わされている。紫姑神は正月十五日夜だけ姿を見せる女神で、それは5句の表現にも関連するが、故實にこだわると今度は七月七日にあらわれるはずの青鳥（漢武故事）と矛盾する。瞬刻の逢瀬を強調して紫姑を用いたのだろう。2句除の字、上掲『唐詩選』（および陳永正）は張相語辭匯釋卷五の助辭説を取るが、他に根據らしい根據を全くあげずに「除字對也字、係以助辭對助辭」と斷定する張相には従いかねる。また麗本の異同もとりあげるに足らない。

3・4 ろくろく言葉も交さないうちにまた別れ別れになってしまいました。ほんのしばらくいっしょに時をすごしたばかりに、（かえって）一層うらみがつのるばかりです。4句、陸鳴皋の解に従う。團圓の引申義がまず表に出て、本義が下の5句を呼び起す（徐德泓）。

5 二八の月影はもう輪が缺けはじめ（そのようにあなたとの團圓は損われ）。十五夜のある日いざよいの月、にはちがいないけれども、元夕の故實に泥してこの句を眼前の實景とみなすのは迂だろう。むしろ詩の内部論理の展開と考えた方がよい。さらに杜

牧の詩にも見られるように、やはり嫦娥（逃げ去った愛人）の影がさしている句でもある。

6 十三の筭のことは空を渡る雁の列、ぼつんぼつんと斜めにならびます。舊説にあるように孤獨・離別の比喩として、情緒的には3句と密接に關連する。しかしこの句のイメージ、直接的にはやはり上句との對應——月夜の雁、からみちびき出されたものであろう。そしてイメージの結合に着目すれば、この一聯はすべて純粹な、言葉のイメージであり、別に實景と考える必要はない表現だと理解されよう。

7・8 かくして夜明けを告げる鐘も鳴ってしまったあと、このあとまだまだなにごとが期待できましよう。ただ笑みを浮べて屏際に花開く梅の木によりそうばかり。笑は自嘲（森槐南）とも、哭不得而笑（陸鳴皋）とも、あるいは自己憐憫とも考えられる。

上掲『唐詩選』（および陳永正）は、笑倚の主體は紫姑にたとえられた女性、7・8句は男性側からの想像、という。李杜の用例、特にもし庾信を踏まえているのならば、8句は確かに女性の行爲とみた方がよいようだ。しかし、底に深い絶望を秘めた（馮浩）7句の語氣はどうしても主人公男性のもでなければならず、二句の文脈がうまく續かぬのではないか。また笑イテ牆邊に倚ル梅樹ノ花とよみ、笑倚の主體を梅花とするのが姚培謙で、これも一案。なお、龍城錄の趙師雄醉憩梅花下條（隋の開皇中に趙師雄が羅浮山で美女に出會い飲宴醉臥のあと目ざめれば「乃在大梅花

樹下」の故事がここにも用いられたという何焯の説は、龍城錄自體が宋代の偽書と既に指摘されており、信ずるに足りない。8句牆邊を牆匡に作る異文は解しがたく、匡は垣のあやまりかもしれない。韋莊の長安舊里詩第一句、滿目牆匡春草深、匡の字は、萬首絕句七言卷六四では垣に作る。

この作品は諸説おおむね艷情惜別の作とする（姚培謙のみ主人公女性説）が、例によって馮浩・張采田は令狐綯に期待を寄せる寓意をみとめ、それぞれ大中四年（馮）、同三年（張）に係年する。が、かりに寓意ありとしても係年などは論外、安徽師大本年表も係年せず。

（深澤一幸・矢淵孝良）

井絡391

井絡天彭一掌中 井絡天彭 一掌の中

漫誇天設劍爲峯 漫りに誇る天設 劍の峯を爲すこと

陣圖東聚燕江口 陣圖東に聚む 燕江の口

4 邊柝西懸雪嶺松 邊柝西に懸く 雪嶺の松

堪歎故君成杜宇 歎く堪し故君は 杜宇と成る

可能先主是真龍 能く先主は是れ真龍たる可けんや

將來爲報奸雄輩 將來爲に報ず 奸雄の輩に

8 莫向金牛訪舊蹤 金牛に向て舊蹤を訪れる莫れ

校

0 唐詩類苑一一二入部懷古類

2 漫瀛奎律髓・唐詩鼓吹・高麗本「謾」

天毛本「大^天作」 錢寫本「大」と旁注したのち抹す

3 燕鼓吹・高麗本・金聖嘆本「煙」 唐音統籤校注「一作煙」

馮浩本「烟^{舊作}誤」

朱鶴齡本校注「當作夔」 稿本旁注「夔」 全唐詩校注

「一作夔」

口鼓吹（廖文炳本）・高麗本・全唐詩「石」統籤「石^{一作}」

馮浩本「石^{舊作口今}從戊籤」

5 歎毛本・朱鶴齡本・全唐詩校注「一作笑」

8 訪鼓吹「放」

韻

上平一東（中）

上平三鍾（峯・松・龍・蹤）

義山近體詩的特徵たる東鍾通用の一例。七律集釋稿（本學報五三

冊六五一頁參照。

*

1 井絡〔文選四左思蜀都賦〕遠則岷山之精。上爲井絡。天帝運

期而會昌。景福旣饗而興作（劉淵林注 河圖括地象曰。岷山之地。

上爲井絡。帝以會昌。神以建福。上爲天井。言岷山之地。上爲東

井維絡。岷山之精。上爲天之井星也（胡克家考異 案此注各本皆

有誤。今無以訂之。昌。慶也。言天帝於此會慶建福也。〔駱賓

王在江南贈宋五之問詩」井絡雙源濤。潯陽九派長。義山的文にも屢見。〔補編九梓州道興觀碑銘〕天彭割壤。井絡分驛。〔又一〇道士胡君新井碣銘〕光芒井絡。鬱勃天彭。そのほか、文集四爲柳珪謝京兆公啓三首之一、補編四爲榮陽公上西川李相公狀。

天彭 〔水經注三三江水注〕秦昭王以李冰爲蜀守。冰見氏道縣有天彭山。兩山相對。其形如闕。謂之天彭門。亦曰天彭關。江水自此已上至微弱。所謂發源濫觴也。

一掌 〔後漢書列傳五七張儉傳〕論曰。……然儉以區區一掌。而欲獨壅江河〔李賢注〕壅。塞也。前書。班固曰。何武王嘉。區區一簣障江河。用沒其身。終嬰疾甚之亂。多見其不知量也。〔張祐題杭州靈隱寺詩〕峰巒開一掌。朱檻幾環延。

2 天設 〔蔡邕難夏育請伐鮮卑議〕天設山河。秦築長城。漢起塞垣。所以別外內。異殊俗也。其外則分之夷狄。其內則任之良吏。〔李白題瓜州新河詩〕吳關倚此固。天險自此設。〔杜甫劍門詩〕惟天有設險。劍門天下壯。連山抱西南。石角皆北向。兩岸崇墉倚。刻畫城郭狀。

劍爲峯 〔文選五六張載劍閣銘〕巖巖梁山。積石戕戕。……狹過彭碕。高踰嵩華。惟蜀之門。作固作鎮。是曰劍閣。壁立千仞。〔李善注〕水經〔漾水〕注曰。小劍戍北去大劍三十里。連山絕險。飛閣相通。故謂之劍閣也。〔文集四爲柳珪謝京兆公啓三首之二〕雖才非張載。未刊劍閣之銘。〔唐玄宗幸蜀西至劍門詩〕劍門橫雲峻。鑾輿出狩回。〔李白上皇西巡南京歌十首之一〕劍壁門高五千

尺。石爲樓閣九天開。〔杜甫秋盡詩〕雪嶺獨看西日落。劍門猶阻北人來。

3 陣圖 〔三國蜀志三五諸葛亮傳〕亮性長於巧思。損益連弩。木牛流馬。皆出其意。推演兵法。作八陣圖。〔水經注三三江水注〕江水又東逕諸葛亮圖壘南。石磧平曠。望兼川陸。有亮所造八陣圖。東跨故壘。皆累細石爲之。自壘西去。聚石八行。行間相去二丈。因曰八陣。既成。自今行師。庶不覆敗。皆圖兵勢行藏之權。自後深識者。所不能了。今夏水漂蕩。歲月消損。高處可二三尺。下處磨滅殆盡。〔元和郡縣志夔州奉節縣〕八陣圖在縣西七里〔元和郡縣補志四〕。〔杜甫八陣圖詩〕功蓋三分國。名成八陣圖。〔劉賓客嘉話錄〕夔州西市。俯臨江岸。沙石下有諸葛亮八陣圖。

燕江 夔江 ともに用例未見。

煙江 〔馮浩補注〕水經注〔三四江水注〕自三峽七百里中。兩岸連山。略無闕處。重岩疊嶂。隱天蔽日。自非停午夜分。不見曦月。按。煙江之稱。猶云苦霧巴江水也。白香山〔秋江晚泊〕詩有煙江澹秋色句。又韓致光〔詠燈〕詩云。遠隨漁艇泊煙江。至宋王晉卿煙江疊嶂圖。則因蘇文忠詩大著名矣。煙江字。究未考始於何文也。

4 邊柝 〔鮑照河清頌序〕萬里神行。飄塵不起。農商野廬。邊城偃柝。冀馬南金。填委內府。馴象栖爵。充羅外苑。

雪嶺松 杜詩にも頻見する雪嶺は即ち雪山、また大雪山とも。蜀の西部に聳える連山で當時はチベットとの國境に當った。松

は成都西北方の松州にかける。〔元和郡縣圖志三二松州嘉誠縣〕雪山在縣八十里。春夏常有積雪。故名。〔杜甫對雨詩〕雪嶺防秋急。繩橋戰勝遲。西戎甥舅禮。未敢背恩私。〔又嚴公廳宴同詠蜀道畫圖詩〕劍閣星橋北。松州雪嶺東。〔九家注〕趙云。九域志。於威州云。南去雪嶺二百六十里。松州卽今之威州。故在雪嶺東矣。義山にまた〔杜工部蜀中離席98〕雪嶺未歸天外使。松州猶駐殿前軍。

5・6 義山より後になるが、〔鄭谷海棠詩〕堪恨路長移不得。可無人與畫將歸。下句の可は反語、上句の堪は可と解すべく、本詩と共通する。

5 故君 〔戰國策一八趙一〕豫讓乃笑而應之曰。是爲先知報後知。爲故君賊新君。大亂君臣之義者。

杜宇 〔文選四左思蜀都賦〕碧出葭弘之血。鳥生杜宇之魄。〔劉淵林注〕蜀記曰。昔有人。姓杜名宇。王蜀。號曰望帝。宇死。俗說云。宇化爲子規。子規。鳥名也。蜀人聞子規鳴。皆曰望帝也。

〔十三州志〕當七國稱王。獨杜宇稱帝於蜀。……時荆地有一死者名鼈冷。其尸亡至汝山。却是更生。見望帝。以爲蜀相。時巫山蜀地。雍江洪水。望帝使鼈冷鑿巫山。治水有功。望帝自以德薄。乃委國鼈冷。號曰開明。遂自亡去。化爲子規。故蜀人聞名。曰。我望帝也。〔又〕望帝使鼈冷治水。而淫其妻。冷還。帝慙。遂化爲子規。杜宇死時適二月。而子規鳴。故蜀人聞之皆起〔漢唐地理書鈔〕。

6 可能 義山にまた〔華清宮148〕當日不來高處舞。可能天下有胡塵。その他唐詩の諸用例は張相語辭匯釋卷一に見える。

先主 〔文選四四鍾會檄蜀文〕益州先主。以命世英才。興兵新野。困躡冀徐之郊。制命紹布之手。太祖拯而濟之。興隆大好。中更背違。棄同卽異。〔李善注〕蜀志曰。先主姓劉諱備。字玄德。涿郡人也。〔杜甫古柏行〕憶昨路繞錦亭東。先主武侯同閭宮。

眞龍 〔三國吳志五四周瑜傳〕瑜上疏曰。劉備以梟雄之姿。而有關羽張飛熊虎之將。必非久屈爲人用者。……今猥割土地。以資業之。聚此三人。俱在疆場。恐蛟龍得雲雨。終非池中物也。

〔文選三六任昉天監三年策秀才文三首之二〕唉傾心駿骨。非懼眞龍。〔李善注〕葉公好龍。室屋彫文。盡以寫龍。於是天龍聞而下之。窺頭於牖。拖尾於堂。葉公見之。奔而退走。……是葉公非好眞龍也。好夫似龍而非龍也。李注の引用は胡克家考異によれば莊子の逸文。〔杜甫雷詩〕眞龍竟寂寞。土梗空俯僂。

7 將來 〔杜甫八哀詩・李光弼〕三軍晦光彩。烈士痛稠疊。直筆在史臣。將來洗箱篋。〔皎然送清勵上人詩〕禪子自矜禪性成。將來來。〔一作心〕擬照建溪清。〔白樂天贈族姪詩〕擊門者誰子。問言乃吾宗。自云有奇術。探妙知天工。既往恨何及。將來喜還通。

奸雄 〔漢書六二司馬遷傳贊〕論大道則先黃老而後六經。序遊俠則退處士而進姦雄。述貨殖則崇勢利而羞賤貧。〔三國魏志一武帝紀裴注〕孫盛異同雜語云。……〔許〕子將曰。子治世之能臣。亂世之姦雄。太祖大笑。〔杜甫詠懷二首之一〕西京復陷沒。翠蓋

蒙塵飛。……倏忽向二紀。奸雄多是非。

8 金牛

〔十三州志〕昔蜀王從卒數千。出獵於褒谷。秦惠王亦敗於山中。怪而問之。以金一筐遺。蜀王及報。欺之以土。秦王大怒。其臣曰。此秦得土之端也。秦王未知蜀道。乃刻石牛五頭。置金於尾下。僞如養之者。言此天牛。能屎金。蜀人見而信。乃令五丁共引牛成道。致之成都。秦知蜀道而亡蜀。今地接故金牛縣界〔漢唐地理書鈔〕。〔李白上皇西巡南京歌十首之八〕秦開蜀道置金牛。漢水元通星漢流。義山にまた〔行至金牛驛寄興元渤海尙書340〕深慙走馬金牛路。驛和陳王白玉篇。

訪舊蹤

〔賈島阮籍嘯臺詩〕如聞長嘯春風裏。荆棘叢邊訪舊蹤。

* *

方回

五六。巧對。

胡震亨（咏古類）

朱鶴齡

3 燕江。無考。必夔字之訛。點畫相近耳。

朱彝尊

此豈感蜀中反復不常而作與。

何焯

〔讀書記〕第一句便破盡全蜀。第二是門戶。第三是東川。第四是西川。四句中包括後人數紙。三四一聯。若不點出東西二字。只是成都詩耳（評本「後人」を「他人」に作り、「三四」以下なし）。

李義山七律集釋稿（二）

○堪嘆一聯。言以世守因餘。猶歸於泯滅。況么麼草竊耶。喝起落句有力。○此篇若作於元和初劉闢據蜀之後。更有關係。在義山之世。止當賦杜元穎悉怛謀兩事也。○觀西崑（酬唱集上楊億・劉筠・錢惟演）成都三篇。何其瑣屑補綴。○如此工緻。却非補初。義山佳處。在議論感慨。專以對仗求之。只是昆體諸公面目耳（評本本條なし）。

3 燕作夔。

〔評本〕定翁云。中四句。萬鈞之力。○世守不可保。因餘無能爲。矧小醜竊據乎。義山去劉闢事未遠。落句。乃孟陽勒銘之志也。深警當時藩鎮不宜負固輕負本。

1 天文。

2 地理。

3 一作烟。

姚培謙

此咏蜀中形勝也。井絡天彭。指掌可盡。劍門重阻。恃險則亡。東則夔江陳圖。古人於此禦敵。西則雪嶺傳柝。今時於此防邊。此籌時者。所當審慮也。若乃姦雄竊發。叛服不常。不知亡國則有故君如杜宇。英略則非先主之眞龍。則亦徒自送死而已矣。縱恃五丁之神力。欲訪金牛之舊蹤。何益。唐自肅代後。蜀中屢屢叛亂。故有是詩。

3 疑作夔。

屈復

以山川之險。武侯之才。照烈之主。尙不能一統天下。而況其他哉。所以深戒後來也。

3 當作變。

程夢星

杜子美詩（諸將五首之五）。西蜀地形天下險。安危須仗出羣才。蓋留心經濟之言也。按唐末。王氏孟氏。卒以竊據。而義山親履其形勢。蚤已憂之。故作詩以戒警奸雄也。起句。分明言其險隘。次句。又言其勿恃險隘。三句。言用兵如孔明者。能有幾人。四句。言鄰封如吐蕃者。亦可助順。五句。言秦時之割據者。亦終爲其臣所竄。六句。言漢時之割據者。畢竟是其宗支。然則地形雖險。莫蒙異志。故七八句結之云云。先事預防。亦深遠矣。

3 朱云。當作變。

紀昀

〔詩說下〕立論正大。詩格自高。五六句。唱嘆指點。用事精切。但三四句。轉折太硬。意雖可通。究費疏解。七句尤率。非完美之篇也。

〔評本〕五六句。用事精切。三四。轉折太硬。意雖可通。而費解亦甚。七八句太粗。七句尤粗。

馮浩

何曰。起便破盡全蜀。二是門戶。三東川。四西川。四句中抱括後人數紙。○如此工緻。却非補初。義山佳處。在議論感慨。專以對仗求之。只是崑體諸公面目耳。

3 舊本皆作燕。戊籤曰。燕。一作烟。朱曰。燕江無考。必變字之訛。余以夔江字少見。亦非。鼓吹本有作烟者。是也。蓋以音訛。非以形訛。故竟改定。

7·8 蜀地特險。自古多乘時竊據。憲宗時。尙有劉闢之亂。詩特戒之。言先主尙不免與杜宇同悲。況么膺輩乎。田（蘭芳）曰。足襯奸雄之魄而冷其覬覦之心。

〔補注〕杜宇。蜀主也。借謂西川府主。

張采田

〔辨正〕晉節高亮。如鏗鯨鐘。三四。寫景精切。結尤深警。無所謂費解也。豪語以爲太粗。過矣。○燕江。當從馮本作烟江。若作燕江。則去蜀何啻萬里。以爲費解亦宜。紀氏蓋據誤本。而妄爲之說耳。

黃侃

此詩與張載劍閣銘同意。皆以懲割據也。首句。言其地之狹小。次句。言地險之不足恃。三四。承首句之意。言其疆域迫促也。五六。言伯主偏隅。終殊中縣之君也。詞特深婉。末句。正寫警戒之意。

廖文炳

此詩言西蜀得二山以壯觀也。首言井絡天彭二山在蜀郡。如在一掌中。蜀倚以爲固。而劍閣不如古。謂劍閣天設之險。乃謾語耳。八陣之圖。在于夔州之東。而邊柝之松。在于雪嶺之西。此皆形勝之險。蜀之故君。化爲杜宇。蜀之先主。名爲真龍。此皆人物之傑出者。爲報將來奸雄。如秦惠輩。不可效昔金牛故事以圖蜀也。圖之

終不可得。何益哉。

金聖嘆

此先生深憂巴蜀之國。江山險峻。或有草竊據爲要害。而特深著嚴切之辭。以爲預戒也。言此井絡天彭。拔地挿天。飛機千里。界山爲門。自古稱爲險絕之區者。以今日朝廷視之。不過在我一掌之中焉已耳。蓋言聖德皇皇。寬仁無外。臣工濟濟。算盡無遺故也。然則雖復陣圖在東。雪嶺在西。天設劍關以爲雄塞。據我論之。固會不得而謾誇也。

前解寫全蜀之險。更不足恃。後解寫起蜀之人。皆未必成也。言前如望帝。佐以龍靈。後如昭烈。輔之諸葛。然而曾不轉眼。盡成異物。又況區區草芥。之子乃欲何所覬覦於其間也哉。

胡以梅（名勝類）

通首誠蜀人之辭。故其意輕視蜀險在言外。首言井絡天彭極小。特舉二者。井絡謂括地象言其吉。而彭以天名。似乎上天所照注者耳。不然。何不別舉耶。次言蜀之最險惟劍閣。亦不足恃。於是東雖陣圖示武。西雖邊柝偵防。方其內變。則爲杜宇之失國。若來外敵。則先主之不能成王業。二傳即亡。將來不逞之徒。休訪金牛險道之舊踪而思割據。亦倣張孟陽劍閣銘之意也。

近代注釋

〔森〕下卷二六五頁。〔安徽師大〕一三七頁。〔陳〕八〇頁。

これも潭州20と同じく、艷詩としての無題詩系列には入らず、

むしろ杜甫晩年成都以降に集中的に作られる借題の詩（律詩排律が多い）の流れをくむものである。2句にはその七律「黃草」の第七句、莫愁劍閣終堪據あたりの影響もあるように思われる。このような詩の性格のため艷詩風諸作に比して解釋の「搖れ」は極く少ないが、懷古ないし詠古を通して作者が何を言わんとしているか、眞意をめぐって舊解は、

A 純然たる詠古詩として特に唐朝の事跡との關連を求めぬ、朱彝尊・屈復・張采田・黃侃・廖文炳・金聖嘆・胡以梅および森、

B 中唐以降の形勢と關連づける、姚培謙および安徽師大・陳・C 特定の人物と關連づける、(1)何焯（評本）・馮浩の劉關、(2)何焯（讀書記）の杜元穎ら、(3)程夢星の王建ら、

以上に分けられる。繫年は諸家やや異なるが大中年間とすることはかわらない——程が七年、馮が三年、張・安徽師大が五年。この時期、蜀の地方は比較的安定しており、劍南道の節度使に野心家がいた様子もないことを考えると、あまり穿鑿しない方がよいであろう。

1 その精靈が天なる井絡の星座となるという岷山も、兩峰あい對する天彭の山も、廣大無邊の天下からみればすべて一つの掌の中なる小さき存在であり。安徽師大が本文の井絡（岷山）と詩題の井絡（全蜀）と、わざわざ意味をずらせて受けてっているのは、借題の借題たるゆえんを曲解するものではなからうか。

2 そんな狭小なる一地域において、あの鋭くとがって人を拒む大剣山を天が設えた剣の峰と誇っても空しいことである。前記のようにとりわけ杜詩との關わりが感じられるところであるが、また蜀の地を詠ずるのに岷山・劍閣をもちだすのは常套手段でもある。天設の天を大に作るテキストがあるのは、1句との重複を嫌ったのだろうが、義山は詩中の字の重複には常に無頓着のようだ。

3・4 かの諸葛孔明が蜀の東端三峽の江邊に石をあつめて八陣圖を作った（のもむかしのこと、今は）蜀の西端に白く輝やく雪山の松に外敵警備の拍子木を懸けたまま使うこともない。3句、集本は殆ど燕江に作るが、張采田のいうごとく北國の燕にとるのは論外で、誤字にちがいない。しかし、烟江と改めるのは4句の地名雪嶺の對としておかしく（森）、さらにやや表現的に弱くなる嫌いがある。當作襲とする朱鶴齡の見解が捨てがたく、後考を待つ。同じく集本殆ど口に作るが、聚との呼應からこれは石と改めてよみたい。4句の邊柝、鮑照の句を踏まえるとすれば現在の平和な状態をさし、程夢星の説もその方向であろう。雪嶺はむろん杜詩の語彙である。

5・6 この蜀の地に據った帝王、あのかつての君主望帝は嘆かわしくも不倫の戀に死してのち悲しく叫ぶ杜宇に成りおおせたし、また先の君主劉玄德は關張の勇と孔明の智をもつてしても本物の龍となって雄飛できたのか。5句の望帝の故事に加え、6句先主の語に杜詩解題十二首之九「先帝貴妃今寂寞」がひびくとするな

らば、何かしら蜀に蒙塵した玄宗を想起させる。因みに李賀は、過華清宮詩の蜀王無近信なる句を以て、清朝の注釋者王琦から、以本朝帝王而稱之曰蜀王、終是長吉缺理處、と批難されている。しかし、さしあたっては衆説に従い、兩者のように傑出した帝でも蜀に據つては結局天下をものにできぬ、という方向として考えておく。5句の歎を笑に作る異文は義山の語氣にふさわしくない。7・8 邪な心を持った有力な武將どもに知らせてやろう、またしても蜀をうかがって金牛道をめざすなどという馬鹿な眞似をこのさきさきやってはならない、と。7句の將來、廖文炳によれば將來ノ（奸雄）、安徽師大によれば將チ來リテだが、詩語解卷上「向後」の訓をとりた。時間的副詞によむべき例、數は多くないが唐詩に見える。8句の訪、鼓吹が放に作るのも句意は同じ。奸雄とは直接的には秦の惠王を指すが、そこに後の蜀主王建を豫見するとまで言う程夢星の説は、義山の政治的洞察力を買い被りすぎた結果論だとしても、在蜀幕下の臣として、或いは何等かの危険性を嗅ぎつけていた可能性は考えられる。

（森瀨壽三）

附錄甲 七律集釋稿（一）補訂

釋稿（一）に載せた廖文炳箋五篇は清人が改作したテキストであり、

いま本稿文獻の明版により廖の原文を掲げる。

(a) 昨夜星辰Ⅲ(六一八頁下段)

此詩言昨夜星之明。風之至時。在畫樓之西桂堂之東。而候君不見之時也。然身不能如彩鳳有翼。飛于君側。空有丹心。若靈犀一點通。達于君耳。五六句。言人皆得幸于君。送闌賭酒。射覆對燈。此何樂也。我獨悵懷而已。徒至夜將盡。聽鼓聲而知應君事者走馬赴臺。如轉蓬不暇耳。終夜徒思。不得于君一會。所思亦何益哉。

(b) 來是空言Ⅳ(六二九頁上段)

此詩言君來則無一言之接。去則絕跡不見。使我思君。至月斜鍾盡而未已也。或夢見而遽別。不能喚回。欲書寄而急催。又不能盡意。遙見宮中之宴樂。則蠟燭半籠于金翡翠之中。遠聞君王之幸。則麝香數度于繡芙蓉之外。已皆不得侍于左右。如劉郎與仙女一別。已恨蓬山遠不能到。今我與君。又如隔蓬山一萬重之遠也。安能已于思耶。

(c) 颯颯東南Ⅴ(六三五頁下段)

此詩首言聞雷輕雨細。則知雲雨之會不成矣。何也。君來則宮中燒香出迎。今則宮門閉鎖而入。君來則天色未曉而至。今則宮人汲井而廻。是知君不復來矣。然君雖不來。而義心懷君。如賈氏窺簾。悅韓掾之年少。似宓妃留枕。待魏王之才人也。噫。徒思君而不得見。如春心不必與花爭發。花開必沾春光。吾不一沾君恩。則一寸

相思一寸即灰矣。心如死灰。又何有於生意耶。

(d) 相見時難Ⅵ(六四八頁下段)

此詩言得見君固難。既見君而別亦難。故想人生易老。如東風無力量而百花易殘。恐老而不得於君也。然我思君之心。如蠶不死則絲不盡。思君之淚。如燭未灰則淚未乾。曉而窺鏡。恐鬢髮之改。夜而思吟。覺月光之寒。蓬山此去不多遠也。青鳥殷勤爲通於君。使得一會可也。詩意以青鳥比朝中執政者。望其汲引之意耳。

(e) 萬里風波Ⅶ(六六六頁上段)

此詩以忠君者不見親而托意于宮女之詞也。首言人間萬事。皆若風波中一葉舟耳。蓋舟浮泛不定。人生亦聚散無常。是以意欲歸去而不忍離乎君。故心初罷而更夷猶不決何也。蓋引去之事。必至事勢不容而後爲之。如至于碧江地沒。已不能行。始可引去。若尙可留。猶當留之。如遊于黃鶴沙邊。未涉于水。亦當少留。且我心能如張飛殺身以報主。王濬盡力以忠君。但徒抱是心。不近君側。噫。人生孰無一事擾于心哉。懷張王之盡忠。動鄉土之歸思。二者交戰于中。皆能令人白頭。安得而易老耶。按陳軫欲去齊不決。其妻曰。公去不決心。豈無謂哉。謂者亦憂嘆意。

附錄乙 各本篇目對照表校補・再續

四九四頁Ⅴ碧城三首之一・總集「晉10」補入